

# 全国農村 読書調査の あゆみ

1946▶▶2012



---

## はじめに

本会は、JAグループの出版文化団体として、月刊雑誌『家の光』『地上』『ちゃぐりん』『やさい畠』および「家の光図書」を発行するとともに、食農教育などさまざまな文化活動に取り組んでおり、その一つに読書運動の促進がある。

『家の光』をJA女性組織の会議などで読みあう「持ち寄り読書」、『家の光』の愛読者による活動「家の光記事活用グループ」、読み聞かせの手法を学ぶ「家の光読書ボランティア養成講座」「家の光読書ボランティアスキルアップ講座」「JA読書サポーター研修会」、読書体験を募集・顕彰する「家の光読書エッセイ」が主な活動で、「全国農村読書調査」はこれらの基礎をなすものである。

第1回の「全国農村読書調査」は、終戦の翌年の昭和21年、事業を再スタートするにあたり、農村の状況を把握する調査の一部として実施された。以降、調査方法などの変更はあったが、調査内容には基本的に継続性を持たせ、一度もとだえることなく平成25年で68回を数える。

そこで65回の調査終了後、これまでの調査をまとめることを計画し、長年担当された本会元職員岡本淳一郎氏の協力と、フリーライターの永江朗氏の解説、専門的な立場から東京大学文学部図書館の永嶺重敏氏、また、同じく読書調査を続けてこられた毎日新聞社世論調査室による両調査比較をいただき、本冊子を作成することができた。

残念ながら、戦時中の中央産業組合会館接收に伴う移転先の事務所が火災にみまわれ、初期の資料を焼失したほか、昭和34年までの資料にも紛失したものがあるため、本冊子の調査データは昭和35年からの書籍・雑誌別調査となっている。昭和44年からは月刊誌・週刊誌別の調査、昭和50年からは雑誌・書籍のいずれかを読んでいる割合を総合読書率とした調査を実施しており、平成11年は調査項目の変更があったために除外した。

調査データの始まる昭和35年には所得倍増計画が閣議決定され、高度経済成長が本格化し、農村もその読書環境も大きく変化してきた。半世紀にわたる調査データからは、永江朗氏のご指摘のとおり、高度経済成長以降の日本社会の変化および出版界の動向と、都市との差異をはらみながらの農村の読書率、読書傾向、男女の読書率との関係などを見て取ることができる。

読書調査は継続が命であり、今後も農村で暮らす人びとの読書とのかかわりを見つめていきたい。これまでの調査と本冊子作成にご協力いただいた皆様に対し、心からお礼を申しあげる。

平成25年5月  
一般社団法人 家の光協会



---

## 全国農村読書調査のあゆみ 1946▶2012 ◎目次

はじめに ..... 1

### 第 1 章▶▶▶

「全国農村読書調査」の概要 岡本淳一郎 ..... 5

▶「全国農村読書調査」とは ..... 6

▶「全国農村読書調査」概要の変遷 ..... 9

▶「全国農村読書調査」と関わってきて ..... 15

#### COLUMN

家の光協会の「全国農村読書調査」と  
毎日新聞社の「読書世論調査」 ..... 16

### 第 2 章▶▶▶

「全国農村読書調査」と  
時代背景から見えるもの 永江 朗 ..... 19

▶総合読書率から ..... 20

▶雑誌読書率から ..... 23

▶月刊誌読書率から ..... 26

月刊誌の変遷をひも解く ..... 29

▶週刊誌読書率から ..... 33

週刊誌の変遷をひも解く ..... 36

▶書籍読書率から ..... 40

読んだ書籍ベストテンをひも解く ..... 43

好きな作家ベストテンをひも解く ..... 48

### 第 3 章▶▶▶

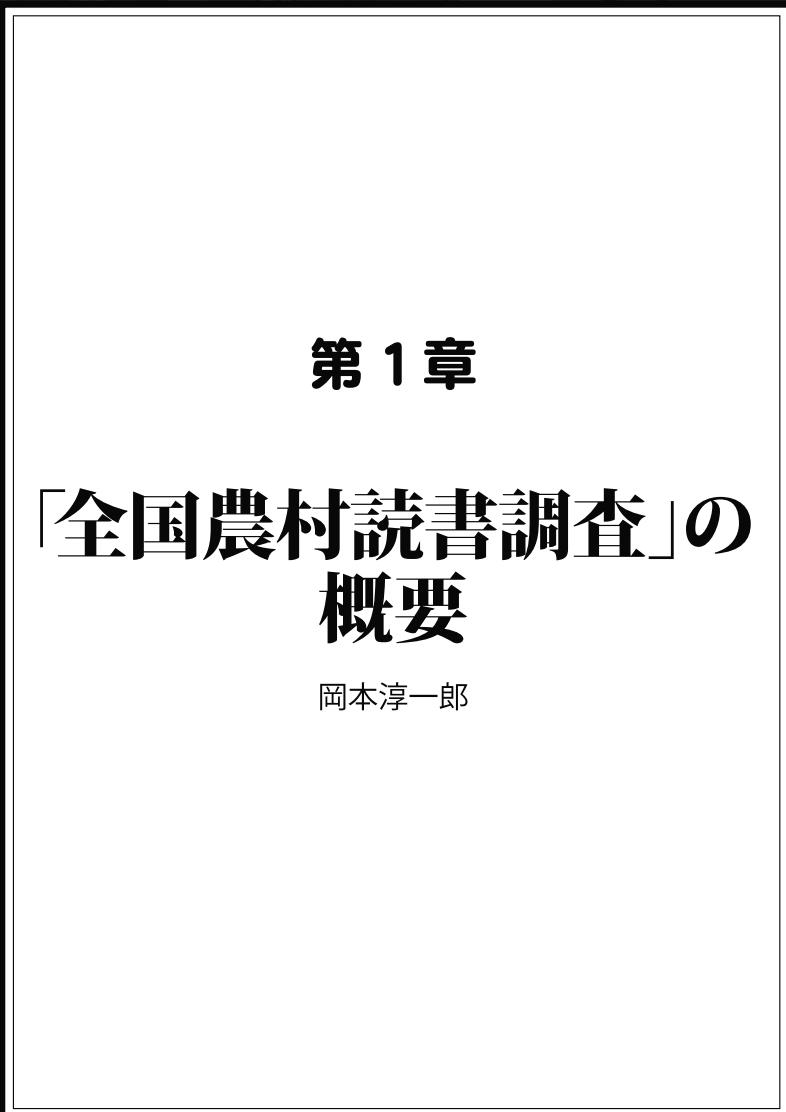
農村読書のこれまでとこれから 永嶺重敏 ..... 53



## 第1章

# 「全国農村読書調査」の概要

岡本淳一郎



# 「全国農村読書調査」とは

## ★科学的調査のはじまり

社会のミニチュアとしての標本を抽出した科学的な調査の出発は、1935（昭和10）年のアメリカ大統領選の予想に求められる。それはまた、世界に最たる調査機関ギャラップの登場でもあった。一心理学者で統計学者でもあったギャラップ（1901～84年）は1935年にアメリカ世論調査所を設立する。そしてその年の大統領選で、わずか2000人を調査してF. ルーズベルトの当選を予想し、1000万人に調査票を送付してA. ランドンの当選を予想したリテラリー・ダイジェスト誌に勝利したのである。

ダイジェスト誌は、電話および自動車の登録者名簿から調査対象者を選んでいた。これに対してギャラップは性、年齢、職業および地域を考慮して、調査地点ごとに調査対象者数を割り当てて調査を実施したのである（割当法）。この結果、ダイジェスト誌の信用は急落し、ギャラップの調査網が全世界に広げられていくことになるのである。

## ★全国に先駆けた読書調査

家の光協会が「全国農村読書調査」を開始したのは、1946（昭和21）年のことである。当時の状況について、年史『家の光の四十年』は次のように述べている。

「戦前苦心して集めた各種の調査資料は、戦災でほとんど焼失してしまっていたし、戦争をして日本現状はすっかり変わってしまい今日仕事を進めていくうえでも、とくに農村の現状を正確に把握しておくことは、さし当たってもっとも急を要する仕事だった。

内閣情報局でも、この計画があることを知って、全面的に協力しようということになった（中略）。主管は戦後新しくできた調査部がこれに当たることになり、（中略）まず、家の光文化調査員を全国に二百名ほど委嘱し、同時に全国十か町村に調査指定村を設置して、これを調査の足がかりにしたのである」

1946年度に、家の光協会はさっそく三つの調査を実施した。「農村の思想動向調査」「農村の生活に関する調査」そして「農村の読書に関する調査」である。この三つめが今日の「全国農村読書調査」として毎年実施されている。5年ごとに実施されている「国勢調査」（1920年開始）を別として、今まで続く調査では「全国農村読書調査」が日本でいちばん古いとされている。

## ★戦後復興のシンボル

戦前のギャラップの躍進を受けて、戦後日本でも近代的技法による調査が急速に発展していく。そのきっかけをつくったのがG H Q（連合国軍最高司令官総司令部）である。G H Qは日本の民主化のために、世論調査の実施を政府に勧告した。これを受け政府は1945（昭和20）年11月、内閣情報局内に世論調査課を設置し、家の光協会の調査事業は全面的な協力を受けることになるのである。家の光協会の職員は、当時80名程度であった。政府および大学研究者等の協力があったからこそなしえた調査事業である。

また、家の光協会が戦後いち早く調査事業を再開させた背景には、農村の情報源としての重要な役割をもっていたこともある。戦時中に農林省が実施した「農業知識収得状況の調査」(6,868人対象)によると、農業知識の情報源は「地方新聞」(40%)に次いで『家の光』は2位で31%を占めている。3位以降は「ラジオ」(25%)、『青年』(5%)、『富民』(4%)、『日本農業新聞』(2%)などであった。家の光協会が社団法人として誕生したのは1944(昭和19)年のことである。設立間もない家の光協会の調査事業に政府が全面的な協力を与えたというのは、農村における家の光協会の役割を政府も認めていたからにほかならない。なお、戦時下の内閣情報局は出版の生殺与奪権を握っていたといわれるほどの力を持っていた。

あまり注目はされていないが、戦後は世論調査が続々と登場した時期でもある。毎日新聞社は戦後の世論調査をけん引してきたのであるが、政府に先駆けて1945年9月に調査室を開設している。そして同年11月には共同通信社と朝日新聞社が、翌46年3月には時事通信社が、同年6月にはNHKが世論調査部署を開設している(松本正生『「世論調査」のゆくえ』2003年、中央公論新社)。松本氏は同書で言っている。

「戦前・戦中の有り様を反省する報道機関にとって、世論調査の実施は、自らの再建へ向けたこの上ない大義名分であった」

読書の推進を事業目的の柱とする家の光協会もまた、戦後の諸事情のなかで「全国農村読書調査」を開始したのである。

### ★調査内容の継続性が特徴

現在、毎日新聞社や読売新聞社などが行なっているいくつかの読書調査があるが、「全国農村読書調査」の特徴の一つに、調査内容の継続性がある。表1に、最新の調査項目を示した。不幸にも、1950(昭和25)年に、戦時中の中央産業組合会館接収による移転先の竹橋の事務所(東京都千代田区)が全焼し、貴重な報告書を焼失したが、農村における読書調査は唯一のものであり、今日では、関係者に広く報告書を配布し、その内容は全文、ホームページで公開している。

表1 「全国農村読書調査」調査項目 2012年(第67回)

① 月刊誌	② 週刊誌	③ 書籍
読書状況	読書状況	読書状況
毎号読んでいる月刊誌の有無	毎号読んでいる週刊誌の有無	—
毎号読んでいる月刊誌名	毎号読んでいる週刊誌名	—
月刊誌の入手先・入手方法	週刊誌の入手先・入手方法	書籍の入手先・入手方法
月刊誌を読む目的・理由	週刊誌を読む目的・理由	書籍を読む目的・理由
—	—	書籍を読まなかつた理由
月刊誌読書時間の増減	—	—
読書時間が増えた理由	—	—
読書時間が減った理由	—	—
家族の定期購読誌の有無	—	—
定期購読誌名	—	—
④ 本(月刊誌・週刊誌・書籍)の購入金額		
⑤ 好きな作家・著者		

⑥ インターネット読書	⑦ 新聞	⑧ マスメディア接触時間
パソコン、携帯電話、電子書籍 端末などの利用状況	定期購読紙の有無	本
電子書籍、電子雑誌の読書状況	定期購読紙名	新聞
電子書籍、電子雑誌の今後の読書意向	—	テレビ
—	—	ラジオ
—	—	インターネット

フェイス・シート			
回答者		回答者世帯	
性別	年齢別	職業別	専業農家・兼業農家・非農家別

※本調査では、月刊誌、週刊誌、書籍を次のように定義した。

月刊誌=月1回、隔週刊、月2回刊、隔月刊、旬刊、季刊などの定期刊行物

週刊誌=週1回発行の定期刊行物

書籍=文庫本、新書本、全集などのコミックスを含む単行本や文庫本で、年鑑、年報、教科書、学習参考書、辞・事典は含まない

## 「全国農村読書調査」概要の変遷

### ★調査地点、調査対象者の抽出

表2に概要変遷の総括表を示した。表から、“無作為抽出”が登場したのは1947（昭和22）年の第2回の調査対象者からであることが分かる。調査地点を無作為抽出するようになったのは、1951年（第6回）からである。当初、調査地点は調査員（学生）の出身地であった。調査対象者も世帯員会員であったりと、無作為抽出の概念はまだ定着していなかったことが推察される。

その理由はまた、アメリカで無作為抽出法が確立していなかったことに求められる。平凡社の『世界大百科事典』によると、1948（昭和23）年の選挙予想でギャラップが当選を予想したデューイが敗北し、トルーマンが当選した。これをきっかけに、アメリカでは割当法に代わって、無作為抽出法という標本調査法が開発され始めたというのである。

これが日本にも導入された。「全国農村読書調査」では第6回の1951（昭和26）年から全国を北海道・東北、関東、甲信越などにブロック分けして調査地点を無作為抽出している。調査対象はその前年の1950年に町村の「居住者名簿」から無作為抽出している（この年から「全国農村読書調査」と称するようになった）。毎日新聞社『読書世論調査30年』でも、「1950年から科学的な属別多段抽出法をとり、草創期に比べ格段に進歩した」と記述しており、1950年ころには日本の科学的調査技法がほぼ確立していたとみてよいであろう。

「全国農村読書調査」の標本抽出で特徴とされるのは、『農業協同組合名鑑』（年次版、（株）日本農業新聞）および農協の正組合員名簿の使用である。同名鑑には全国の総合農協名とその正組合員戸数が記されており、各ブロックの調査地点（農協）と調査対象者数が無作為に決定できる。これをもとに1971年（第26回）から2005年（第60回）までは現地におもむき、「農協の正組合員名簿」から世帯を、市町村役場の「住民基本台帳」から調査対象者個人を無作為抽出した。ただこの方法も、2006（平成18）年からは調査地点を国勢調査区から無作為抽出するよう変更した。

表2「全国農村読書調査」概要の変遷

年	地点数	対象者 年齢等	対象者数	地点抽出法	対象者抽出法	調査方法	調査員
1946	15	18～ 45歳	1500	町村から集落を有意抽出	世帯員会員	郵送法	学生・ 協会職員
1947	9	小6 家族	不明	町村から学校を有意抽出	自作、小作地主から 無作為抽出	面接法	学生・ 協会職員
1948	20	小6 家族	4000	10府県から各2町村を有意抽出	自作、小作地主から 無作為抽出	郵送法	学生・ 協会職員
1949	10	不明	3400	9県から10町村を有意抽出	不明	不明	学生・ 協会職員
1950	11	不明	3300	全国9地区に分け11道県を有意抽出。 協同組合学校生徒の出身地を調査地点とした	町村「居住者名簿」各 ページ第3位者を無作為抽出	面接法	学生・ 協会職員
1951	11	16歳 ～	不明	全国を9地区に分け、町村を無作為抽出	不明	面接法	学生・ 協会職員
1952	15	18～ 65歳	不明	全国を15地区に分け、町村を無作為抽出	不明	面接法	学生・ 協会職員
1953	15	16～ 65歳	不明	全国を11地区に分け25県および町村を無作為抽出	不明	面接法	学生・ 協会職員
1954	26	16歳 ～	不明	全国を11地区に分け24道県を無作為抽出。 町村は琉球を加え無作為抽出	不明	面接法	学生・ 協会職員
1955	30	16～ 60歳	1500	産業構造を基本に30層に分け、町村を無作為抽出	各層の人口割合で 1500を配分。町村「世 帶台帳」から無作為抽出	面接法	学生・ 協会職員
1956	30	16～ 60歳	1500	産業構造を基本に30層に分け、町村を無作為抽出	各層の人口割合で 1500を配分。町村「世 帶台帳」から無作為抽出	面接法	学生・ 協会職員
1957	30	16～ 60歳	1650	産業構造を基本に30層に分け、町村を無作為抽出	各層の人口割合で 1500を配分。町村「世 帶台帳」から無作為抽出	面接法	学生・ 協会職員
1958 ↓ 1959	30	16～ 60歳	1650	産業構造を基本に30層に分け、町村を無作為抽出	上記と同じ。ただし 「住民台帳」から無作為抽出	面接法	学生・ 協会職員
1960 ↓ 1961	30	16～ 59歳	3000	農家世帯の多い国勢調査区を全国11地区に分け22層に層化。各層の人口割合から地点を無作為抽出	「住民台帳」「世 帶台帳」から無作為抽出	面接法	学生・ 協会職員
1962	100	16～ 59歳	1500	農家世帯の多い国勢調査区を全国11地区に分け22層に層化。各層の人口割合から地点を無作為抽出	「住民台帳」「世 帶台帳」から無作為抽出	面接法	学生・ 協会職員
1963	100	16～ 59歳	3000	農林省「農協調査」から無作為抽出	農協の組合員名簿、 住民基本台帳から無作為抽出	面接法	学生・ 協会職員
1964 ↓ 1970	50	16～ 59歳	1500	農林省「農協調査」から無作為抽出	農協の組合員名簿、 住民基本台帳から無作為抽出	面接法	学生・ 協会職員
1971 ↓ 1975	33	16～ 59歳	1000	全国を9ブロックに分け「農業協同組合名鑑」の正規組合員戸数割合より各ブロックの地点数を決定し、無作為抽出	農協の組合員名簿、 住民基本台帳から無作為抽出	面接法	学生・ 協会職員
1976 ↓ 1983	33	16～ 59歳	1000	全国を8ブロックに分け「農業協同組合名鑑」の正規組合員戸数割合より各ブロックの地点数を決定し、無作為抽出	農協の組合員名簿、 住民基本台帳から無作為抽出	面接法	学生・ 協会職員

1984 ↓ 1992	33	16～59歳	1000	全国を8ブロックに分け「農業協同組合名鑑」の正規組合員戸数割合より各ブロックの地点数を決定し、無作為抽出	農協の組合員名簿、住民基本台帳から無作為抽出	面接法+一部留置法	学生・協会職員
1993 ↓ 1994	33	16～59歳	1000	全国を8ブロックに分け「農業協同組合名鑑」の正規組合員戸数割合より各ブロックの地点数を決定し、無作為抽出	農協の組合員名簿、住民基本台帳から無作為抽出	留置法+一部面接法	学生・協会職員
1995 ↓ 1998	33	16～69歳	1000	全国を8ブロックに分け「農業協同組合名鑑」の正規組合員戸数割合より各ブロックの地点数を決定し、無作為抽出	農協の組合員名簿、住民基本台帳から無作為抽出	留置法+一部面接法	学生・協会職員
1999	43	16～69歳	1500	全国を8ブロックに分け「農業協同組合名鑑」の正規組合員戸数割合より各ブロックの地点数を決定し、無作為抽出	農協の組合員名簿、住民基本台帳から無作為抽出	留置法+一部面接法	学生・協会職員
2000 ↓ 2005	35	16～69歳	1200	全国を8ブロックに分け「農業協同組合名鑑」の正規組合員戸数割合より各ブロックの地点数を決定し、無作為抽出	農協の組合員名簿、住民基本台帳から無作為抽出	留置法+一部面接法	学生・協会職員
2006 ↓	60	16～79歳	1200	国勢調査区(農林業地区)から無作為抽出	住民基本台帳から無作為抽出	留置法	調査会社の登録調査員

## ★調査方法

調査で回答を得る方法として主なものは、郵送法、留置法、面接法、電話法であろう。近年、新聞でよく目にするのは R D D (random digit dialing) と呼ばれる電話法の一種である。これは、コンピュータで無作為に作成した番号に電話をして調査を行う方法である。経費と時間の効率化を目指し、調査方法も時々刻々と変化している。

「全国農村読書調査」では、1947年（第2回）から面接法をとってきた。しかし1984年（第39回）からは、面接法に加え一部留置法をとり入れるようにした。そして1993年（第48回）からは留置法を基本に一部面接法とし、2006年（第61回）からは留置法のみとした。

## ★調査員

戦後間もなく、全国に200名ほどの家の光文化調査員と10か所の調査指定町村を設置したことは前に述べたが、「全国農村読書調査」を担当したのは主に学生と家の光協会職員であった。農協の前身は産業組合であるが、その教育機関として1926（大正15）年に産業組合学校を開設している。これは戦後（財）協同組合学校となり、1955（昭和30）年に（学）協同組合短期大学に改組、さらに1969（昭和44）年からは中央協同組合学園に改組された。

この農協系統学校の学生には、1996年（第51回）まで、調査員として協力いただい

た。また、実践的農業経営・技術の教育を行う鯉淵学園の学生には1960年（第15回）から1969年（第24回）まで、1970年（第25回）から1978年（第33回）は都道府県農協中央会を退職した家の光事業職員に調査員を委嘱している。そして、1973年（第28回）から2005年（第60回）までは農林水産省農業者大学校の学生も担当、1978年（第33回）からは京都府立大学と佐賀大学も協力、その後、岡山大学、東北大学、東京農業大学などの農学部系学生の協力も得ている。学生に調査員を委嘱するにあたっては、学生の農村体験の場としてゼミの一環で取り組んでいただいた学校も多かった。

### ★調査の一部外注

先の松本正生氏によると、近年調査のアウトソーシングが急速に進み、委嘱者がどういう調査が行われているか把握していないケースも多いという。家の光協会でも2006年（第61回）から（社）新情報センターに一部委託している。家の光協会が行うのは、質問票の作成、集計チェック、報告書の作成、配布である。調査の一部委託に当たっては、次のような背景があった。

最大の背景は2003（平成15）年の「個人情報の保護に関する法律」の制定である。この前から、農協や市町村役場が名簿の閲覧を拒否したり、閲覧できないような仕組みをつくるところが増えていた。農協では、東京の事務所から調査協力確認の電話を入れたときに断られれば、すぐに代わりの農協を抽出することになるが、役場はそうはいかなかった。「住民基本台帳の閲覧は許可します。しかし、地区ごとに生年月日順になっています。五十音順になっています。世帯の特定はできません」「閲覧する世帯を前もって決めてきて住民基本台帳を閲覧することはできません」等々である。家族構成が分からないと調査対象者の抽出ができない。そこでもよりの役場に再度文書と電話で住民基本台帳の閲覧を申請すると、ここもダメ。聞いてみると、同じ県内の市町村は郡単位で連絡をとりあったかのように、すべてダメとしているというのである。

個人情報保護法では、調査を実施するに当たって細かいガイドラインが決められている。加えて、いわゆる“過剰反応”で調査拒否の広がりは急であった。

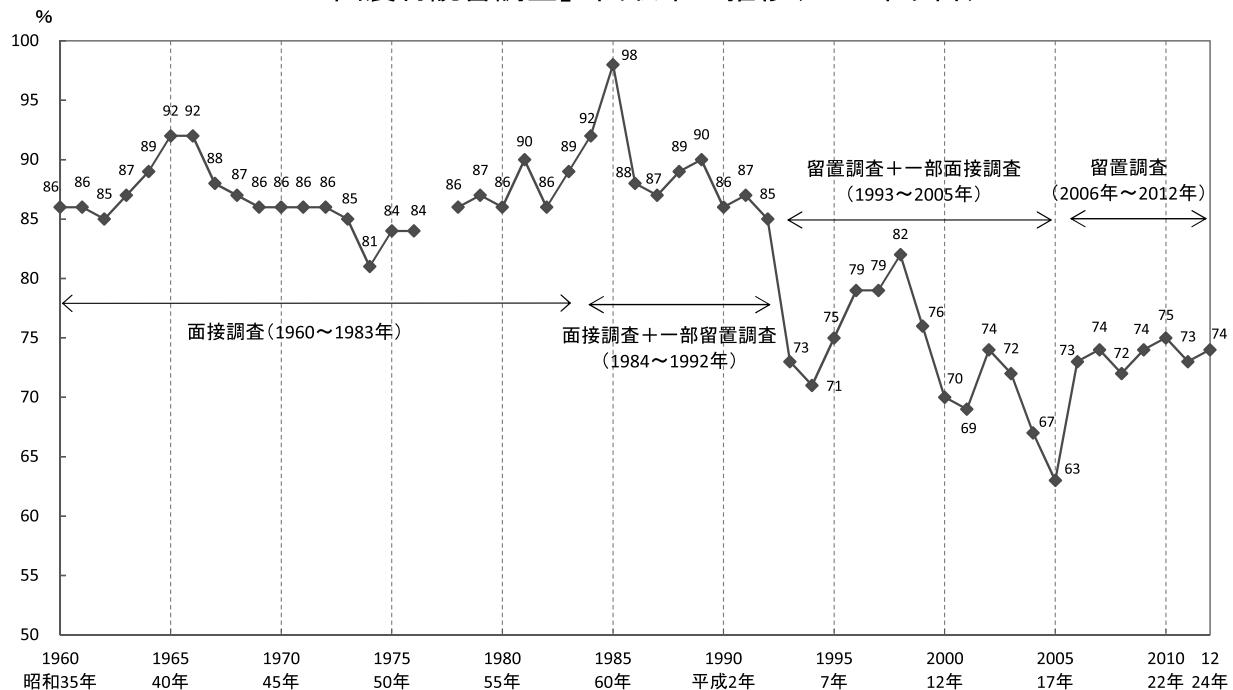
家の光協会の定款第2条に「読書運動の普及」が掲げられているが、事業の実質的中心は出版である。監督官庁であった農林水産省からは、公益事業として「全国農村読書調査」は高い評価を得ていたと聞くが、調査担当現場は“個人情報の保護”に悲鳴をあげていた。調査を3年に1回にしよう、5年に1回にしてもいいのではないか——そんなことを上司と話し合ったものである。

そして個人情報保護法の制定から3年後、調査専門機関である（社）新情報センターに調査の実施を委託することになったというわけである。

### ★回収状況

図1は1960年（第15回）以降の回収率の推移をしたものである。1992年（第47回）まではほぼ85%以上という高い回収率を示している。この期間は面接法中心で調査を行っている。農家でも外へ勤めに出る人が多くなっていたが、そういう場合は朝早くか、夕方帰宅

図1 「全国農村読書調査」回収率の推移(1960年以降)



の時間に訪問して調査を行う。本を全く読んでいない人なら調査は数分で終わるが、読んでいる人となると20分や30分はかかる。畠に行って面接するのは当たり前で、なかには夜の10時ころまで調査を行ったという報告もあった。高い回収率はそれらの努力のたまものであった。

しかしその後、留置法に調査方法を変ると、回収率は75%前後に急落した。留置法を行うに当たっては、最初の1日めで調査票（1地点平均33票）をすべて配布し、あとの3日間ほどで回収するという方法を指示していた。この方法だと、相手に対面しなくても調査が行えるため、どうしても回収の意欲が失われるのであろう。調査時期は、学生であるから8月の夏休みである。学生のなかには、アルバイト意識が大きくなり、回収の努力をしない調査員が増えた。車で調査を行う学生も多くなり、事故の報告もくるようになった。このことも専門の調査機関に委託した理由の一つとなった。

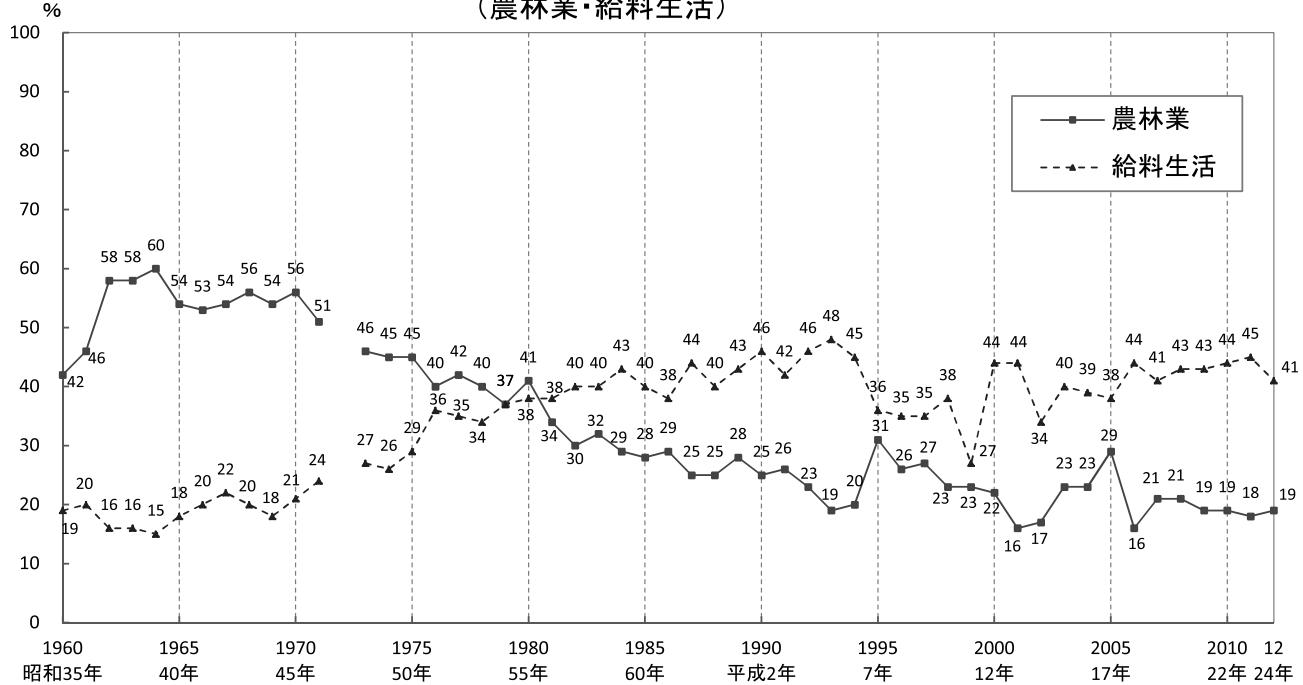
表3 「全国農村読書調査」回答者の構成2012年（実数、カツコ内は構成比%）

年 別	有効回収	全 体	男 性	女 性
		(882) (100.0%)	(424) (48.1%)	(458) (51.9%)
年 齢	1 6 ~ 1 9 歳	40 (4.5%)	20 (4.7%)	20 (4.4%)
	2 0 ~ 2 9 歳	58 (6.6%)	21 (5.0%)	37 (8.1%)
	3 0 ~ 3 9 歳	84 (9.5%)	45 (10.6%)	39 (8.5%)
	4 0 ~ 4 9 歳	117 (13.3%)	63 (14.9%)	54 (11.8%)
	5 0 ~ 5 9 歳	199 (22.6%)	93 (21.9%)	106 (23.1%)
	6 0 ~ 6 9 歳	237 (26.9%)	115 (27.1%)	122 (26.6%)
	7 0 ~ 7 9 歳	147 (16.7%)	67 (15.8%)	80 (17.5%)
職業別	農 業	165 (18.7%)	91 (21.5%)	74 (16.2%)
	給 料 生 活	357 (40.5%)	188 (44.3%)	169 (36.9%)
	主 婦	117 (13.3%)	- (-)	117 (25.5%)
	自 営 業	83 (9.4%)	50 (11.8%)	33 (7.2%)
	学 生	40 (4.5%)	19 (4.5%)	21 (4.6%)
	無 職	120 (13.6%)	76 (17.9%)	44 (9.6%)
	そ の 他	- (-)	- (-)	- (-)
世帯別	専 業 農 家	99 (11.2%)	44 (10.4%)	55 (12.0%)
	第 1 種 兼 業 農 家 注 1 )	67 (7.6%)	35 (8.3%)	32 (7.0%)
	第 2 種 兼 業 農 家 注 2 )	245 (27.8%)	129 (30.4%)	116 (25.3%)
	非 農 家	458 (51.0%)	209 (49.3%)	249 (54.4%)
	不 明	13 (1.5%)	7 (1.7%)	6 (1.3%)
JA (農協) 組合員別	正 組 合 員	335 (38.0%)	196 (46.2%)	139 (30.3%)
	准 組 合 員	79 (9.0%)	31 (7.3%)	48 (10.5%)
	非 組 合 員	341 (38.7%)	152 (35.8%)	189 (41.3%)
	わ か ら な い ・ 不 明	127 (14.4%)	45 (10.6%)	82 (17.9%)

注1)「第1種兼業農家」とは、農業以外で働いている同居家族がいるが、農業所得のほうが多い農家をいう。

注2)「第2種兼業農家」とは、逆に農業以外の所得のほうが多い農家をいう。

図2「全国農村読書調査」職業別回答者構成比の変遷  
(農林業・給料生活)



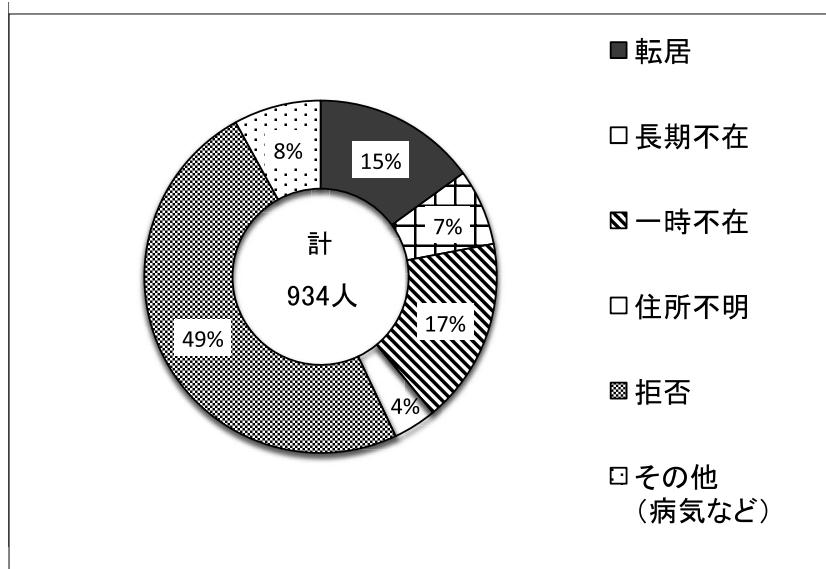
### ★回答者の構成

表3に最新の調査での回答者の構成を示した。女性(52%)が男性(48%)よりも多く、年齢別では60歳以上が44%、50歳以上では66%となっている。世帯別では非農家が52%と過半数であった。図2は、1960(昭和35)年以降の職業別構成の推移を農林業と給料生活でみたものである。1976(昭和51)年に給料生活が農林業を上回り、最新の2012(平成24)年では、給料生活が41%、農林業が19%となった。

### ★「拒否」が半数

この3年間について、調査不能の内訳をみたのが図3である。これによると、「拒否」が49%と圧倒的に多く、次が「一時不在」で17%、以下「転居」15%、「長期不在」7%、「住所不明」4%などとなった。

図3「全国農村読書調査」調査不能の内訳(2010～2012年の合計)



## 「全国農村読書調査」と関わってきて

1945（昭和20）年4月のB29の空襲により、東京・神田区（当時）の日本大学校舎内にあった協会事務所が全焼し、目黒区の富士見幼稚園に移転、同年9月には小石川区（当時）の満蒙会館に移転した。1946年早々には出版戦争責任の追及を受けることになる。また、1945年の1年間で出版社が340社から2000社に増えるなどして、用紙の配給統制が厳しくなった。このため1944（昭和19）年に150万部あった『家の光』の部数は1946年には45万部に急減し、翌47年には25万部にまで減少した。

経営上はいちばん厳しかったこの時代に、家の光協会はなぜ「復興は調査から」という方針を打ち出せたのであろうか。調査は1946年度の3本で終わらず、翌47年には「農村の文化財普及状況の調査」（2回実施）「農村の世論調査」「農村児童の読書状況の調査」の4本を、さらに48年には「農村の読書傾向調査」（2回実施）「農村の生活実態調査」の3本を、49年には「『家の光』読者とその環境調査」「『家の光』読者と農村文化事業調査」「農村読書傾向調査」「農村読書運動事例調査」の4本を、そして50年には出版界の情勢調査などを含め10本も調査し、以降毎年3～7本ずつ9調査を実施している。「全国農村読書調査」が今日まで67回、1回も欠かさず継続できたのは、当時の調査に対する思いの強さが引き継がれたからであろう。

今、日本は「世論調査王国」ともいわれている。ことに選挙や内閣支持率など政治にかかる世論調査は、話題性もあり、調査結果が政策の動向に大きく影響するようになった。それを民主主義の原則といえばそのとおりだが、反面、本来必要とされるべき調査がおろそかになっているのではと危惧される。

しかし、いずれにしても、これだけ調査環境が厳しくなり、調査の質が問われるようになると、調査を企画する側が調査の理論をよく勉強し、その結果をどのように活かすかを調査する側とされる側とがともに認識しなければ、とくに読書調査のような地味な調査は困難になるだろう。

「全国農村読書調査」は、母集団が農村というだけに、これまでの注目度は低かったといってよい。しかし先ごろ制定された「文字・活字文化振興法」の基本理念には、“読書の恩恵を平等に享受できる環境を整備すること”とある。日本図書館協会の資料によると、自分の住む市町村に図書館がない人は全国に500万人にのぼるという。「全国農村読書調査」が67回の歴史を持っているというのは、それだけで重要な意味を持っている。一方、大都市部と農村部の読書環境の格差は広がるばかりである。家の光協会の事業活動の柱の1つは農山漁村の「読書運動の普及」である。

先人たちの調査に対する熱い思いを引き継ぎながら、さらに、これから時代の文化の向上に寄与する「全国農村読書調査」となってほしいと切に願うばかりである。

岡本淳一郎 家の光協会 元職員

# 家の光協会の「全国農村読書調査」と 毎日新聞社の「読書世論調査」 ～自由記述の質問を続けて～

中村美奈子

毎日新聞社世論調査室

敗戦間もない1947年、毎日新聞社で「出版に関する世論調査」が行われた。以後毎年続く「読書世論調査」の1回めとなった調査だ。全国の男女各5,000人、計1万人を対象に調査票への回答を求めた。調査結果は同年12月1日付で、用紙不足のため裏表1枚だった毎日新聞に報じられた。男女とも、文化国家づくりに必要な出版物を「科学技術部門」と最も多く回答した旨が2段見出しで書かれ、当時の意気込みが伝わってくる。

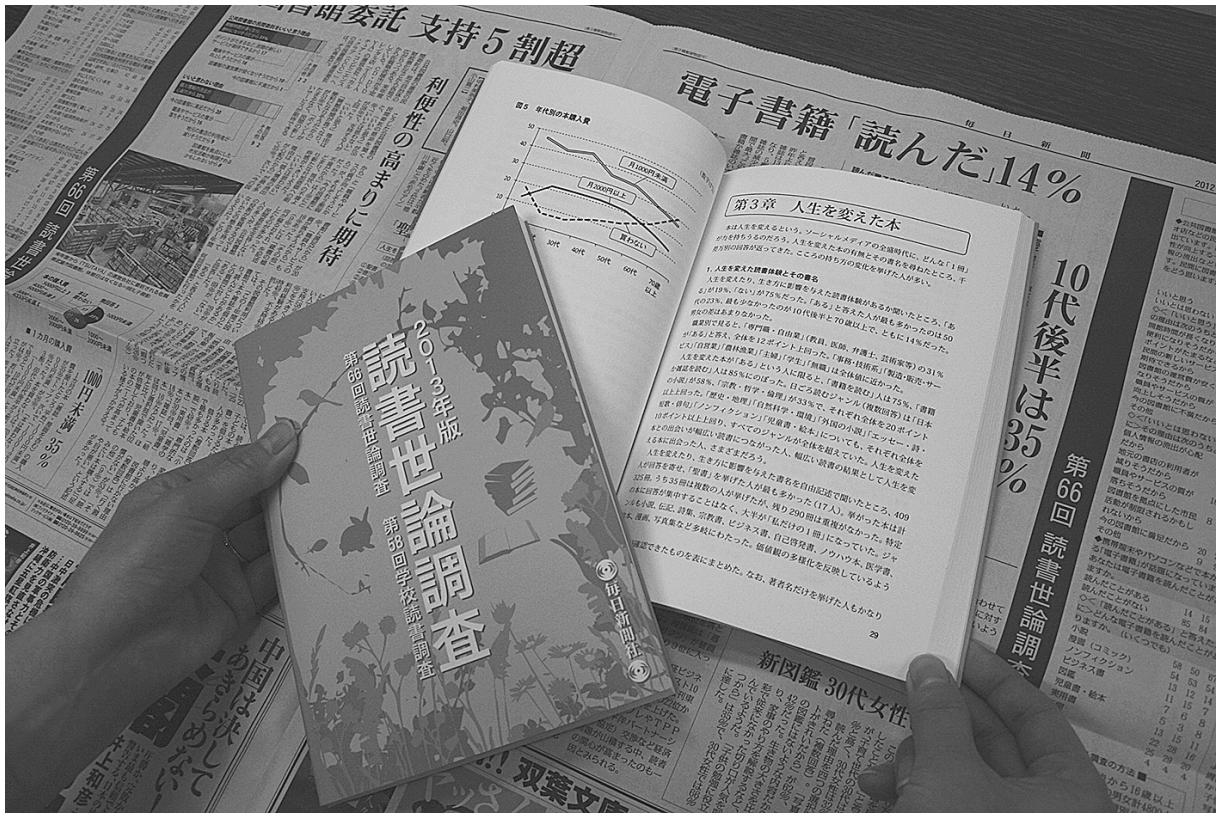
その前年、のちの「全国農村読書調査」が始まった。配給が続き、食べることもおぼつかないなか、本を読むことに関する調査が相次いで成立したことに驚く。

インターネット関連などに質問内容を広げながらも、大半は第1回から同じ質問を続けている「全国農村読書調査」に対して、「読書世論調査」は、その年々の出版や読書に関する話題をメインの質問に据えるのが特徴だ。メディアミックスや新書ブーム、日本語ブームなど、出版界に話題があふれていた時代はとうに過ぎ、今やニーズが個別化し、世の関心事が何なのか、見えにくいくことこのうえない。質問づくりには頭の痛い時代である。

電子書籍端末の展示会で端末の使い勝手を試したり、駅でちらしを見つけた書評イベントをのぞいてみたりと、ヒントを探してあちこち出向いているが、質問づくりの基本作業は日々の新聞各紙の熟読だ。「読書」「書店」「電子書籍」といったキーワードが見出しに取られた記事を見つけては、室員がスクラップする。そのスクラップをまとめて読み返してみると、項目ごとのここ数年の流れが浮かび上がってくる。

昨年夏に実施した第66回の調査では、佐賀県武雄市がレンタルビデオ大手の「T S U T A Y A（ツタヤ）」の運営会社に図書館運営を委託したニュースをきっかけに、公立図書館運営の民間委託を主な質問に据えた。読者層が広がりつつある電子書籍に関しては、読んだジャンルについて初めて聞いてみた。出版点数では電子書籍は「コミックがほとんど」と言われるが、実際にはどんなジャンルが読まれているのか、気になったからだ。

一方、「全国農村読書調査」の特長は、自由記述による回答をいくつも長年続けている点だと思う。なかでも、この半年間で読んだ書籍や好きな作家、著者を自由に挙げてもらって、その変遷が分かるのが興味深い。「全国農村読書調査」の場合、書籍にマンガ本が含まれているため、「この半年間で読んだ書籍」のベスト10には大ヒットしたマンガ本がしばしば登場している。1990年代以降をみると、テレビドラマや映画の原作本、その



年のベストセラーが大半を占めている。ここ数年で名作がランキングに入ったのは、格差社会の広がりを背景に、プロレタリア文学の「蟹工船」が再評価されて話題になった2009年だけだ。

選択肢ではなく自由記述による回答は、個々の内容の精査や入力に非常に手間隙がかかる。回答に疑問があつても、調査対象者との接触は調査員の訪問時に限られ、後日問い合わせることはできない。調査票に記された回答の一文字一文字をじっと見つめ、他の質問への回答も参考にして、総合的に判断するしかない。自前の調査であつても委託であつても、その労苦に変わりはなく、自由記述の継続質問には敬意を表したい。

「読書世論調査」は第1回の1947年から第46回の1992年まで継続して、「よいと思った本」を自由記述で聞いていた。当初の書名を見ると、戦争を背景にした小説が上位を占めており、生きるとは何かを真剣に自問していた日本人の姿が浮かび上がってくる。やがて隨筆、宗教書、マナー本が顔を出し、多様化が進んでいく。最終年の92年は、現代小説が大半を占めた。戦後の日本人の読書が、物事を考えるために読む「重読書」から、楽しむことが目的の「軽読書」へ変わったことを、自由記述の書名は教えてくれる。

日本人が戦後、何を求めて生きてきたのか。その答えの一端を示しているのが、二つの調査だと思う。調査は継続が命である。先人の熱意を伝える当時の報告書を読みながら、次代へ引き継ぐ責任をかみしめている。



## 第2章

# 「全国農村読書調査」と 時代背景から 見えるもの

永江 朗



## 総合読書率から

総合読書率とは、月刊誌、週刊誌、書籍のいずれかを読んでいると答えた人の割合である。ふだん「読書をする」「本を読む」というと、書籍を読むことがイメージされ、雑誌は読書に含まれないとと思う人もいるようだが、この調査では雑誌と書籍に分け、さらに雑誌を月刊誌と週刊誌に分けて聞いている。

この設問自体が比較的新しいので、データは1962年以降のものしかない。

グラフ(P22参照)を一見してわかることがいくつかある。まず、とてもデコボコしている。これは重要なことだ。私たちは調査結果が報告されるたびに、前年に比べて何ポイント増えたか、あるいは減ったかということに注意を奪われがちだが、それだけでは長期的な変化を見失ってしまう。しかし、実際には年によって増えたり減ったりしながら、全体としてはなだらかに動いていく。

次に、大きな山が3つか4つ、あるのがわかる。いちばん高い山は1988～89年から93年ごろを頂上にした山である。次に高いのは1979年ごろが頂上の山。3つめの山は2002年が頂上。4つめを山といつていいかどうか迷うが、2007年ごろにも少し盛り上がりがある。

山があるということは谷もある。1つめの谷は1984～86年。85年は山になっているけれども、もしこの山がないとすれば、ここは谷になっている。2つめの谷は1998年から2000年ごろ。1999年のデータがないが、ここが谷になっている。2005、6年あたりも谷だ。

小さなデコボコ、そして大きな山と谷があるが、全体としては右肩下がりになっている(時間軸を左から右へとした場合)。だいたい80年代の後半ぐらいまではデコボコしながら緩やかに上昇し続け、90年代の中ごろから下降していく。

つまり、1990年ごろまでは本を読む人が少しずつ増え続けていた、あるいは読む人の比率を維持していたけれども、90年代半ばから本を読む人は減っていっているといえる。

もう一つ気づくのは男女差である。いただいた資料のグラフに、蛍光マーカーで色をつけてみた。全体は黄色、男性は青、女性はピンク。するとどうだろう、70年代、80年代は男女の線は絡まるようになっていたのに、90年代からは離ればなれである。女性は上へ、男性は下へ。なんだか日本社会の縮図を見ているよう……。

おおまかな傾向は、日本の新刊書籍雑誌の市場動向とほぼ一致している。社団法人全国出版協会・出版科学研究所(以下、出版科学研究所)の出版指標年表を見ると、書籍と雑誌を合わせた推定販売金額のピークは1996年で、グラフにするとほぼきれいな山形を描いている。しかし、金額ではなく推定販売部数で見ると、書籍のピークは1988年であり、雑誌は91年から98年ごろである。

これらの「山」と「谷」のとき、世の中ではどんなことが起きていたのかを見てみよう。

まず、初めの山である1970年代後半に何があったのか。ロッキード疑惑事件が広まり、田中角栄元首相が逮捕されたのが1976年。河野洋平らが新自由クラブを結成するな

ど、自民党の長期政権にゆらぎが見え始めたのがこのころだった。円高が進み、戦後最大の不況到来といわれた。もっとも、円高といつても1ドル250円から180円。まさか21世紀に1ドル100円以下の時代が来るとは、誰も予想していなかっただろう。出版界では文学全集の刊行で定評のあった筑摩書房が1978年に倒産した（のち、会社更生法により再生）。角川書店が角川文庫を映画とのメディアミックス（「読んでから見るか、見てから読むか」）によってブームをつくったのと比較されたが、実際は放漫経営による自滅だった。

二つめの山である1990年前後はどうだろう。世界史の大きな転換点だった。大事件が世界じゅうで起きた。ソ連ではゴルバチョフのペレストロイカが始まった。ドイツではベルリンの壁が崩れ、やがて東西ドイツが統一された。共産圏の国々が次々と崩壊して民主化された。中国では天安門事件が起きた。そして日本では昭和が終わった。

80年代の日本はバブル景気に沸いた。しかし、バブルとは弾けて初めてそれがあぶくだったと気づくもの。株価の暴落が始まったのは90年2月だったが、そこからの長期不況を日本はまだ脱せないでいる。出版や広告の分野にバブル崩壊の影響が出るのは数年後で、90年前後の「山」は、バブル景気を反映したものといえるかもしれない。みんなが書籍や雑誌を買って読む余裕があったのだ。

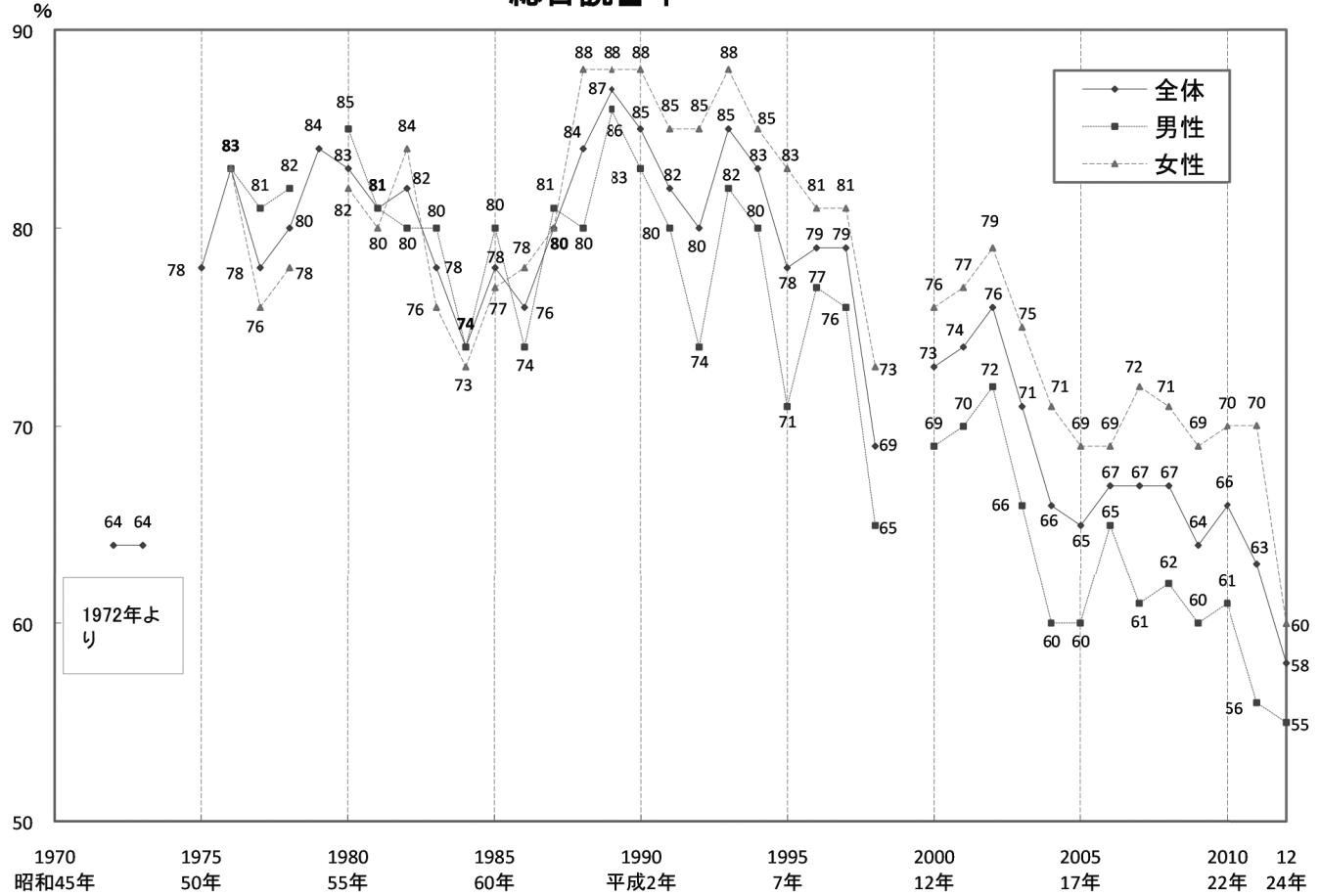
2002年や2007年のわずかな盛り上がり——「山」というより「丘」といったほうがいいかもしれない——はどうだったのか。小泉内閣の時代。アメリカではブッシュ大統領の時代だ。農業に関連する大きなできごととしては、牛肉偽装事件があった。雪印食品の解散は2002年の4月。2003年はアメリカがイラク戦争を始めた。内閣府の景気基準日付によると、2002年1月から2009年3月までの86か月、日本経済は拡張期間にあった。庶民に好況の実感はないが、いざなぎ景気（1965年～70年）を超える「いざなみ景気」などとも呼ばれる（当時の与謝野馨経済財政担当大臣は「ダラダラかげろう景気」と言ったそうだが）。

「谷」はどうだったか。1984年は天候が最悪だった。2月、3月は厳寒と豪雪、夏は猛暑にたたられた。ロスアンゼルス・オリンピックが開かれたが、ソ連は不参加、東欧諸国も同調した。85年は日航ジャンボ機墜落事故が起きた。バブル景気のきっかけとなるプラザ合意もこの年。86年は男女雇用機会均等法が施行され、チェルノブイリ原発が大事故を起こし、三原山が噴火した。

1998～2000年は携帯電話が爆発的に普及した時期である。2000年3月に5,000万台を超えて、固定電話を抜いた。1995年のWindows 95発売に始まるインターネットの普及も、ますます広がっていく時期である。「ノストラダムスの大予言」やコンピュータ2000年問題（カレンダーの切り替わりで世界じゅうのコンピュータが暴走をすると恐れられた）などに怯える人もいたが、なにごともなかった。

2005年は愛知万博があった。ブロードバンドが広がり、インターネットの利用者はますます増えた。2001年に登場したアップルコンピュータのiPodも普及し、ソニーのウォークマンに取って代わった。

## 総合読書率



## 雑誌読書率から

雑誌読書率は週刊誌または月刊誌（週刊誌以外の雑誌）を読んでいると回答した人の比率である。こちらのデータは1960年から。つまり戦後の高度経済成長期からバブル景気とその崩壊を経て現代に至るまでの半世紀をカバーしているわけである。

まずはグラフ（P25参照）の全体をみてみよう。直感的にわかるのは、全体的に右肩下がりに傾いていることである。グラフの左端に近いあたりが80%ぐらいであるのに対して、右端のほうは50%ぐらいだ。左端は1960（昭和35）年で、右端は2012（平成24）年である。半世紀で30ポイントも下がってしまった。もちろんグラフがこの後もずっと下がり続けるかどうかはわからない。2012年が底で、2013年からいきなり跳ね上がるかもしれない。V字回復というやつだ。でも、線の傾き全体をみると、そんな夢のようなことは起こりそうにないと察しがつく。

もう少し細かく見ていくと、1960年から1985年ごろまでは、右下がりではあるけれども、その傾斜は緩やかだ。25年、つまり四半世紀で5ポイントほどのマイナスである。それが急に上昇を始める。89年から95年ぐらいまでが山の頂上だ。そして1998年、62%（全体）に向けて一気に落ちる。まるで崖だ。アイガー北壁かヨセミテのエルキャピタンか。もっとも、データのない1999年を挟んで2000年は66%（全体）と4ポイントほど戻しているから、98年のデータは特異点として考えるべきかもしれない。それでもグラフの線は2002年にいちど上昇したあと下がり続ける。こんどの傾斜は1985年までの四半世紀とは違ってかなりきつい。1990年から2010年までの20年で、およそ30ポイント下がっているのだ。言い換えるならば、1995年を境に、急激な「雑誌離れ」が始まり、現在も進行中なのである。

もう一つ気づくのは男女差である。総合読書率のときと同じようにグラフに色をつけてみた。男性は青で、女性はピンク。すると、1960年から1970年までの10年間は、青の線が上にあり、ピンクの線は下にあることがわかる。ところが1970年代になると2本の線は絡まりあうようになる。そして1990年代以降はかつてと逆転する。ピンクの線が上にあり、青の線が下にくる。つまり1960年代は女性よりも男性のほうが雑誌をよく読んでいた（ただしその男女差はごくわずかだった）。70年代になると雑誌を読むことに性差は関係なくなった。そして90年代以降は、男性の雑誌離れが進み、女性のほうがまだよく読んでいるという状態だ。

では、社会の変化と雑誌読書率の変化について見てみよう。

まず1960年代。細かく見ると、1962年から64年にかけて、グラフは少し下がりぎみだ。正直いって、ちょっと納得できない気もする。というのも、1964年といえば東京オリンピックの年である。東海道新幹線が走り、高速道路ができた。夢と希望に満ちていた、貧しいけれども輝かしい日々、と昨今、ノスタルジックに語られる時代ではないか。

しかし、だからこそ、ともいえる。よく、日本のテレビの普及はミッチャー・ブームからと

いわれる。ミッチャーといつても及川光博ではない。正田美智子、すなわち現在の皇后と天皇が結婚するときに、そのパレード見たさにテレビを購入する人が増えたといわれるのだが、それはテレビ普及の始まりであって、実際にテレビが日本の隅々にまで行き渡るのには時間がかかる。62年から64年にかけてが普及の完成とみてよいのではないか。

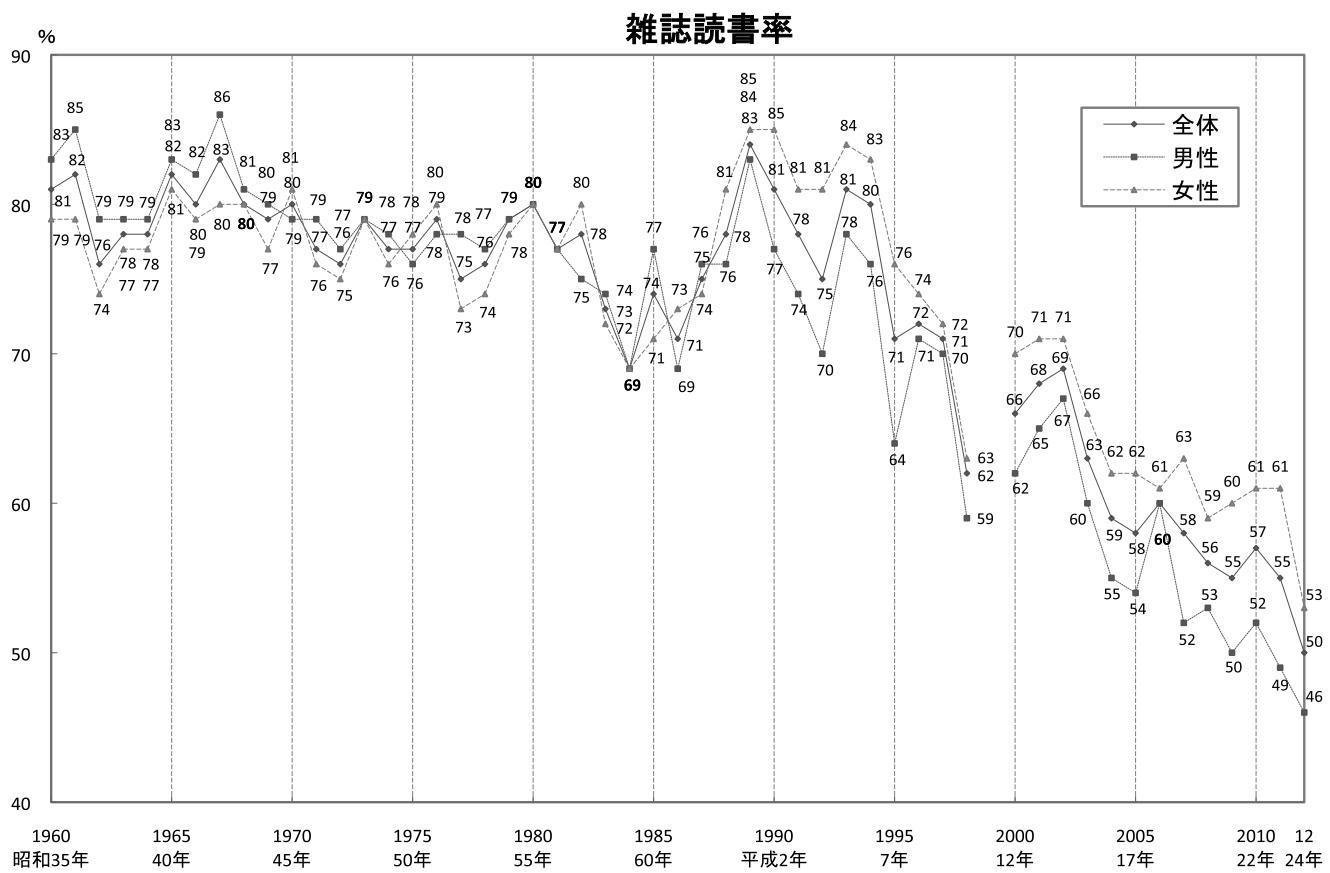
1984年ごろにもグラフの谷がある。ファミリーコンピューターが任天堂から発売されたのは前年、83年の7月だった。ゲームが若者文化のなかで重要な位置を占めるようになるのはこのときからである。またレンタルビデオ店のTSUTAYAが誕生するのも83年（1号店は「蔦屋書店」）。つまり、雑誌を読む時間は、60年代、70年代はテレビに侵食され、80年代からはゲームとビデオに奪われたと考えることができる。時間は有限であるから、新しいメディア、新しい娯楽が誕生すると、それまであったメディア・娯楽に費やされていた時間が奪われるのは必然的なことである。

しかし、グラフは84～86年の谷から一転して上昇し、89年にピークを迎える。この時代、日本のバブル景気も頂点に達する。景気がいいということは、消費が盛んだということでもある。雑誌には消費情報があふれている。また、総合読書率の項でも述べたように、89年は世界情勢も国内状況も大きく変わった時期だった。世の中の情報を吸収し、咀嚼し、各人が対応するためにも、雑誌が重要な役割を果たしていた。

一方、パーソナルコンピュータは一部の専門的な技術者や研究者、そしてマニアが扱うものであり、まだまだ一般化はしていなかった。ワープロ専用機で作成した年賀状が「冷たい感じがする」などといわれていた時代である。

出版科学研究所のデータをみると、雑誌の推定販売金額のピークは1997年。推定販売部数では95年となっている（94年にいちどマイナスに転じ、95年は93年を超える部数だった）。農村読書調査のほうが少し変化が速い。

バブルが弾けて以降、女性ファッション誌も凋落傾向にあるとはいえ、他ジャンルの雑誌に比べるといい状態が続いている。細分化し、新たなマーケットを広げると同時に、付録戦略などで読者を引きつけてきた。90年代以降、女性の雑誌読書率が高い状態が続いているのは、雑誌そのものの「元気度」の違いが反映しているからといえそうだ。



## 月刊誌読書率から

この調査でいう「月刊誌」とは、週刊誌以外の定期刊行物すべてのことを指す。隔週刊や月2回刊、旬刊、隔月刊、季刊などの雑誌も含む。

グラフ（P28参照）は1969（昭和44）年から始まっている。全体を見回すと、傾向は雑誌の総合読書率とほぼ同じだ。1990年代の前半まではほぼ横ばいで、90年代後半から右肩下がりになっていく。

ただ、ほぼ一貫して女性の読書率のほうが高いのが特徴。70年代、80年代には、まれに男女が逆転することもあるが、基本的には女性の読書率のほうが高い。また、90年代以降は男女差が広がる傾向にある。

こうした全体の傾向を押さえたうえで、細かな部分をみていくと、いくつかおもしろい年があるのに気づく。

たとえば1970年は女性が71%と高い数字を記録している。これは今のところ最大値である1989年の72%に次ぐ数字である。男性も64%と高くなっているが（こちらも89年の68%に次ぐ歴代2位）、女性ほどではない。

1970年に創刊された女性誌といえば『an・an』である。現在は週刊誌であるが、創刊当時は月2回刊だった。その後、月3回刊を経て週刊誌になった。男性誌『平凡パンチ』の姉妹的雑誌として、そしてフランスのファッショングループ『ELLE』の提携誌としてスタートした。

次に男女差が大きくなるのが1975年である。75年に創刊された女性誌で有名なのは『JJ』。ただしこのときは女性週刊誌『女性自身』の別冊として、隔月刊でのスタートだった。ちなみに雑誌名の『JJ』は『女性自身』の略である。その後、80年代になると、コンサバ系女子大生ファッションのバイブルのようにもなった。『CanCam』『ViVi』『Ray』とともに、赤文字雑誌（表紙のロゴが赤いので）と呼ばれるようになる。

このころは男性誌でも『GORO』（74年）、『月刊プレイボーイ』（75年）、『POPEYE』（76年）など、出版史に残る名雑誌がたくさん創刊されているのだが、男性読書率は50%台前半と低いままだ。たしかにこれらの男性誌は大都市の大学生（いわゆるシティボーイ）を主要ターゲットとしていると思われる所以、農村のライフスタイルにはあまり受け入れられなかつたのかもしれない。

1977年は数少ない男女逆転の年の一つ。女性の読書率が男性のそれよりも3ポイントほど下回っている。出版史ではひどい不況の年といわれ、なかでも女性雑誌が不振だったと伝えられる（『出版データブック』出版ニュース社）。ただ、『クロワッサン』や『MORE』などが創刊したのもこの年。

次に女性は大きく伸びたが、男性は低迷したのが1982年である。この年の創刊は『olive』、先述の『CanCam』、『LEE』など。男性誌でも『スコラ』や『ドリップ』、『新潮45』などが創刊されたのだが、農村の男性には受けなかったのか。

月刊誌読書率が最大になるのは1989年である。女性72%、男性68%、全体で70%。その前後の年もそれなりに高かった。いま振り返ると、日本の雑誌界がもっとも幸

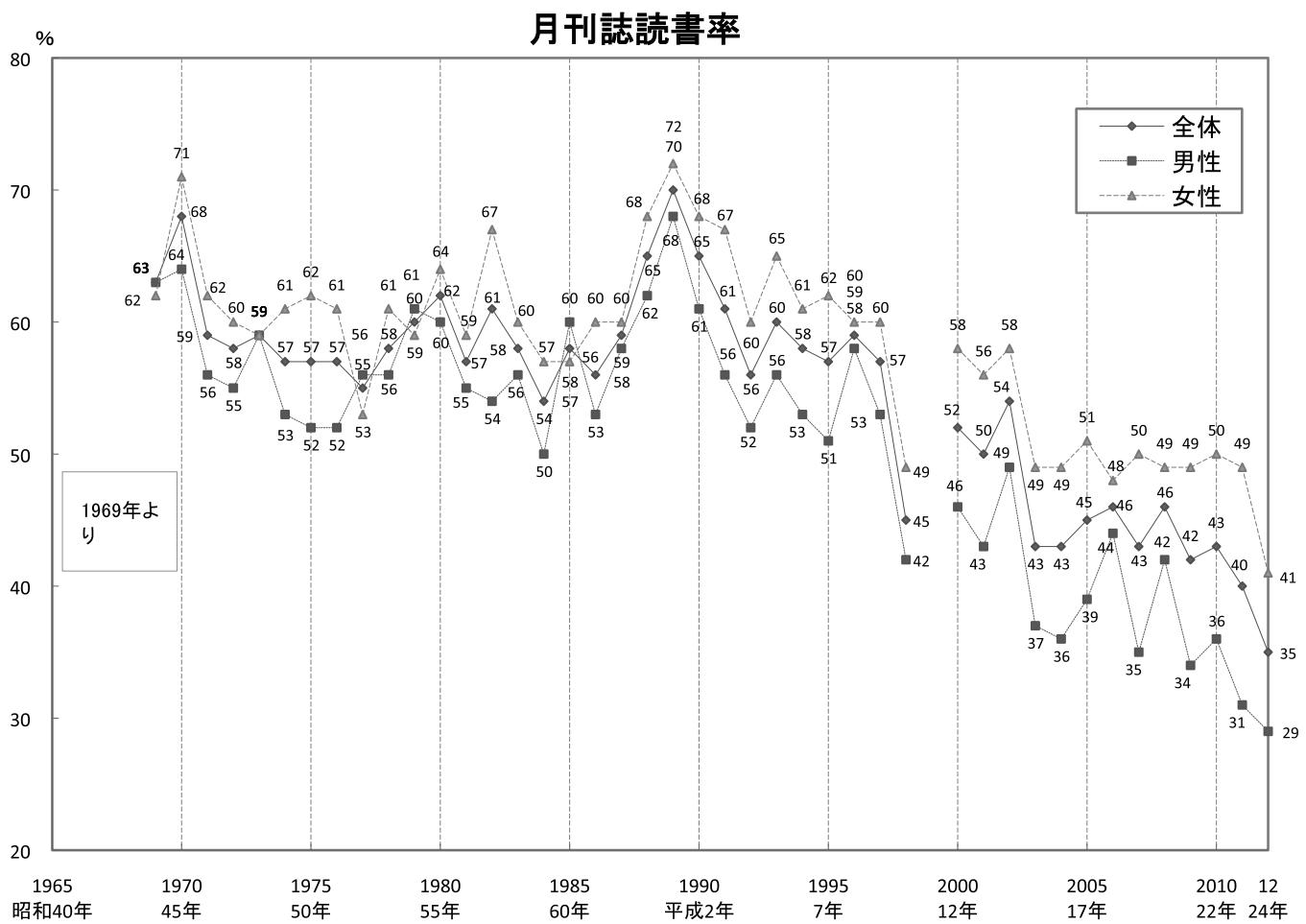
福だった年だったのかもしれない。『出版データブック』には「女性誌、男性誌ともに創刊ラッシュ、売り上げは伸びず」と書かれている。この年の創刊誌には、『ヴァンテーヌ』、『ELLE』、『CUTiE』、『CREA』、『月刊 Asahi』、『SAPIO』、『サライ』、『SPUR』など、現在も続いている雑誌や、一つの時代をつくった雑誌などが多い。月刊の女性ファッション誌が増え、しかも各誌とも広告で分厚くなっていく時期である。だが、バブルはしょせんあぶく。いつか弾ける。

97年から98年にかけて、グラフはストンと落ちる。まるで崖から転落したかのようだ。消費税率は3%から5%に上がり、山一証券や北海道拓殖銀行が経営破綻するなど、バブル崩壊の最終幕が切って落とされた。

90年代から21世紀の最初の10年間にかけて、グラフは右肩下がりになっていく。しかし、女性の読書率が93年からほぼ横ばい（それでもバブル期前後に比べると10ポイント程度落ちている）のに比べて、男性は上下しながらも緩やかに落ちている。出版界でもバブル崩壊後、とりわけ新世紀に入ってからは、総合誌や論壇誌が軒並み部数を落としていった。『月刊 Asahi』をリニューアルした『論座』も、『月刊現代』も、保守系論壇誌の『諸君！』も消えていった。バブル期に広告収入を当て込んで次々と創刊された男性向けビジュアル総合誌も、広告の不振と部数減によって休刊していった。

この男女差には、ネットの影響の違いもみてとれる。女性のほうがネットを使わない、というのではない。ネットに代替されるか否かが、女性誌と男性誌では違っていると考えられるからだ。女性ファッション誌の魅力はなんといっても美しい写真による商品紹介である。ネットや携帯電話ではなかなか代替できない。それに対して、総合誌や論壇誌にあるような文字情報は、ネットや携帯電話でも事足りてしまう。

新世紀に入ってからの男性は、02年、06年、08年を除くと、ほぼ一貫して数字を落としているわけだが、10年からの傾きに注目したい。09年からいちど2ポイントほど回復して落としている。傾きが急だ。これは08年のリーマン・ショックや円高不況、長期デフレなどが反映しているとみていいだろう。また、11年は東日本大震災があった年である。



## ◆月刊誌の変遷をひも解く

読んでいる月刊誌はどのように変わったのか、1960年からの半世紀を振り返ってみたい(P30~32参照)。1位は常に『家の光』なので除外して考えよう。60年代の上位は『平凡』『主婦の友』『明星』である。『平凡』は映画や歌謡曲の話題を中心とした娯楽雑誌で、全国に読者の会ができるほどの人気だった。『明星』はそのライバル誌。芸能人が「スター」と呼ばれていた時代の雑誌である。『主婦の友』は文字通り主婦向けの総合誌で、衣食住あらゆることを扱った。

70年代後半になると『ミセス』が登場する。『主婦の友』と同じく既婚女性向けの雑誌だが、服飾情報(ただし「買う」より「作る」が主体)を中心。農村女性の生活意識の変化を感じる。また、77年には少女マンガ誌『別冊マーガレット』が登場している。マンガ文化が全国に広がっていった。一方、『平凡』や『明星』はランキング上位から姿を消し、登場しても下位にとどまる。

81年、『JJ』が登場する。コンサバ系女性ファッション誌だ。83年には『MORE』も。こちらはワーキングウーマンを主要ターゲットにしたビジュアルな総合誌。89年にはそのライバル誌である『with』もランクインしている。『別冊マーガレット』と並んで『月刊少年ジャンプ』もランキングの常連となった。

おそらく、農村のライフスタイルが都市とそう変わらなくなつたのは、このころからと考えていいのではないか。モータリゼーションに対応するように、広い駐車場を備えた郊外型書店が全国に増え(その多くはレンタルビデオ店との複合だった)、コンビニエンスストアも増えていった。

91年には『ESSE』が、93年には『すてきな奥さん』が登場する。既婚女性を対象にした総合誌ではあるが、『主婦の友』や『婦人俱楽部』のような読み物主体の良妻賢母誌ではない。料理や掃除・整理、そして節約をいかに楽しく簡単にやるかのノウハウ集だ。家事は姑の指示に従つて、という封建的家族観が崩壊した、とは言いすぎだろうか。90年代後半になると、『オレンジページ』や『レタスクラブ』も登場する。『オレンジページ』はダイエーの出版部門が創刊した料理雑誌で、レシピを中心に家事のノウハウを提供する(現在はJR東日本系)。ダイエー、イトーヨーカドー、ジャスコなど大型のスーパー、ショッピングセンターが全国に広がるのもこの時期だ。

新世紀になると、『オレンジページ』はランキング上位の常連となる。NHKの番組テキスト『きょうの料理』も。食文化の変化、食の都市化は、全国の農村でも進んでいる。

半世紀分のデータをみて気づくのは、女性誌の優位と男性誌の影の薄さだ。総合誌『文藝春秋』は男性誌というわけではないが、読者層は男性が多いといわれる。80年代は『現代』が顔を出すこともあったが、それも一瞬だ。

読んでいる月刊誌ベスト10の推移<毎号読む+ときどき読む>①

1960年代前半(1960年～1964年)

15回<1960(昭和35)年>			16回<1961(昭和36)年>			17回<1962(昭和37)年>			18回<1963(昭和38)年>			19回<1964(昭和39)年>		
順	誌名	2587	順	誌名	2575	順	誌名	1279	順	誌名	2618	順	誌名	1335
1	家の光	693	1	家の光	885	1	家の光	442	1	家の光	928	1	家の光	514
2	平凡	324	2	平凡	254	2	平凡	93	2	平凡	141	2	平凡	91
3	主婦の友	147	3	主婦の友	140	3	主婦の友	70	3	主婦の友	132	3	主婦の友	69
4	明星	141	4	明星	136	4	明星	63	4	明星	111	4	明星	66
5	婦人俱楽部	140	5	婦人俱楽部	124	5	婦人俱楽部	42	5	婦人生活	99	5	地上	44
6	婦人生活	133	6	文藝春秋	118	6	婦人生活	41	6	婦人俱楽部	97	6	婦人生活	42
7	文藝春秋	99	7	婦人生活	116	7	文藝春秋	40	7	文藝春秋	82	7	婦人俱楽部	39
8	主婦と生活	73	8	主婦と生活	96	8	主婦と生活	33	8	主婦と生活	40	8	主婦と生活	32
9	地上		9	地上	55	9	蚕糸の光	18	9	地上	38	9	文藝春秋	29
10	中央公論		10	婦人公論	43	10	地上	16	10	蚕糸の光	33	10	蚕糸の光	22
10	暮らしの手帖													

1960年代後半(1965年～1969年)

20回<1965(昭和40)年>			21回<1966(昭和41)年>			22回<1967(昭和42)年>			23回<1968(昭和43)年>			24回<1969(昭和44)年>		
順	誌名	1384	順	誌名	1383	順	誌名	1320	順	誌名	1301	順	誌名	1286
1	家の光	469	1	家の光	681	1	家の光	523	1	家の光	407	1	家の光	376
2	平凡	84	2	平凡	96	2	主婦の友	79	2	主婦の友	70	2	主婦の友	91
3	主婦の友	73	3	主婦の友	65	3	平凡	60	3	平凡	48	3	平凡	61
4	明星	63	4	明星	57	4	婦人俱楽部	58	3	明星	48	3	婦人俱楽部	53
5	婦人俱楽部	54	5	婦人俱楽部	47	5	明星	51	5	婦人俱楽部	39	5	文藝春秋	48
6	地上	48	6	地上	45	6	主婦と生活	42	6	婦人生活	38	6	婦人生活	47
7	文藝春秋	43	7	文藝春秋	40	7	婦人生活	39	7	主婦と生活	32	7	主婦と生活	41
8	婦人生活	38	8	婦人生活	37	8	文藝春秋	38	8	文藝春秋	30	8	明星	39
9	主婦と生活	37	9	主婦と生活	32	9	地上	36	9	現代農業	29	9	地上	36
10	蚕糸の光		10	蚕糸の光	24	10	現代農業	24	10	地上	27	10	蚕糸の光	22
								24	10	蚕糸の光				
								24	10	リーダイ				

1970年代前半(1970年～1974年)

25回<1970(昭和45)年>			26回<1971(昭和46)年>			27回<1972(昭和47)年>			28回<1973(昭和48)年>			29回<1974(昭和49)年>		
順	誌名	861	順	誌名	862	順	誌名	848	順	誌名	840	順	誌名	812
1	家の光	314	1	家の光	252	1	家の光	200	1	家の光	194	1	家の光	198
2	主婦の友	69	2	主婦の友	51	2	主婦の友	45	2	主婦の友	61	2	主婦の友	62
3	婦人俱楽部	40	3	婦人俱楽部	41	3	婦人俱楽部	37	3	婦人俱楽部	42	3	婦人俱楽部	34
4	婦人生活	36	3	主婦と生活	22	3	主婦と生活	24	3	平凡	27	3	婦人生活	31
5	主婦と生活	27	5	現代農業	21	5	婦人生活	23	5	婦人生活	22	5	主婦と生活	30
6	現代農業	23	6	平凡	20	6	平凡	6	6	主婦と生活	20	6	現代農業	22
7	地上	22	6	婦人生活	20	6	明星		6	現代農業	20	7	蚕糸の光	21
8	文藝春秋	20	8	若い女性	8	文藝春秋		17	8	地上	15	8	明星	19
9	平凡	16	9	明星	9	現代農業		16	9	文藝春秋	15	9	平凡	14
10	PHP	15	9	地上	10	地上		10	10	蚕糸の光	10	若い女性		13

1970年代後半(1975年～1979年)

30回<1975(昭和50)年>			31回<1976(昭和51)年>			32回<1977(昭和52)年>			33回<1978(昭和53)年>			34回<1979(昭和54)年>		
順	誌名	840	順	誌名	843	順	誌名	861	順	誌名	871	順	誌名	866
1	家の光	172	1	家の光	201	1	家の光	186	1	家の光	204	1	家の光	191
2	主婦の友	70	2	主婦の友	38	2	主婦の友	36	2	主婦の友	49	2	主婦の友	54
3	婦人俱楽部	43	3	文藝春秋	36	3	婦人俱楽部	25	3	婦人俱楽部	34	3	文藝春秋	35
3	文藝春秋	33	4	平凡	32	4	婦人生活	24	4	現代農業	31	4	現代農業	34
5	明星	26	5	主婦と生活	30	5	文藝春秋	20	5	婦人生活	26	5	婦人俱楽部	28
6	主婦と生活	25	6	明星	28	6	主婦と生活	19	6	文藝春秋	25	6	主婦と生活	27
6	平凡	25	7	婦人俱楽部	25	7	現代農業	18	7	主婦と生活	17	7	婦人生活	16
8	現代農業	24	8	婦人生活	17	8	明星	12	8	ミセス	16	8	地上	15
8	婦人生活	24	9	地上	15	9	明星		9	平凡	14	9	暮しの手帖	13
10	地上	11	9	ミセス	15	10	蚕糸の光		10	地上	13	9	PHP	13
									10	若い女性	13			
									10	別冊マガレット	13			

読んでいる月刊誌ベスト10の推移<毎号読む+ときどき読む>②

1980年代前半(1980年～1984年)

35回<1980(昭和55)年>			36回<1981(昭和56)年>			37回<1982(昭和57)年>			38回<1983(昭和58)年>			39回<1984(昭和59)年>		
順	誌名	860	順	誌名	898	順	誌名	860	順	誌名	892	順	誌名	
1	家の光	244	1	家の光	213	1	家の光	196	1	家の光	215	1	家の光	
2	主婦の友	53	2	現代農業	32	2	主婦の友	44	2	主婦の友	29	2	主婦の友	
3	現代農業	35	3	婦人俱楽部	26	3	現代農業	28	3	文藝春秋	23	3	現代農業	
4	主婦と生活	32	4	主婦の友	22	4	主婦と生活	23	4	別冊マーガレット	20	4	月刊少年ジャンプ	
5	蚕糸の光	22	5	主婦と生活	21	5	婦人俱楽部	21	5	現代農業	19	5	婦人俱楽部	
6	地上	21	6	文藝春秋	20	6	文藝春秋	16	6	婦人俱楽部	14	5	P H P	
6	文藝春秋	21	7	別冊マーガレット	18	7	明星	15	7	主婦と生活	13	7	主婦と生活	
8	婦人俱楽部	18	8	明星	16	7	婦人生活	15	8	N H K 趣味の園芸	12	7	婦人公論	
9	婦人生活	13	9	J J	14	9	N H K 趣味の園芸	13	8	M O R E	12	9	文藝春秋	
10	別冊マーガレット	11	9	平凡	14	9	P H P	13	10	地上	11	10	N H K 趣味の園芸	
10	ミセス	11				9	若い女性	13						

1980年代後半(1985年～1989年)

40回<1985(昭和60)年>			41回<1986(昭和61)年>			42回<1987(昭和62)年>			43回<1988(昭和63)年>			44回<1989(平成元)年>		
順	誌名	983	順	誌名	882	順	誌名	873	順	誌名	889	順	誌名	898
1	家の光		1	家の光	159	1	家の光	161	1	家の光	203	1	家の光	209
2	主婦の友		2	主婦の友	31	2	現代農業	35	2	現代農業	33	2	現代農業	32
3	現代農業		3	現代農業	17	3	主婦の友	28	2	主婦の友	33	2	主婦の友	32
4	N H K 趣味の園芸		4	N H K 趣味の園芸	16	4	月刊少年ジャンプ	20	4	文藝春秋	18	4	文藝春秋	22
5	文藝春秋		5	文藝春秋	14	5	N H K 趣味の園芸	18	4	M O R E	18	5	月刊少年マガジン	19
6	P H P		5	P H P	14	6	文藝春秋	15	6	主婦と生活	14	6	M O R E	17
7	月刊少年ジャンプ		5	月刊少年ジャンプ	14	7	月刊少年マガジン	13	7	N H K 趣味の園芸	13	6	w i t h	17
7	別冊マーガレット		8	別冊マーガレット	13	8	暮らしの手帖	12	7	月刊少年ジャンプ	13	6	N H K 趣味の園芸	17
9	婦人俱楽部		8	婦人俱楽部	13	8	婦人百科	12	9	月刊少年マガジン	11	9	婦人百科	15
9	N H K きょうの料理		8	N H K きょうの料理	13	10	J J	11	10	明星	10	9	P H P	15
9	現代		8	現代	13	10	P H P	11						
						10	主婦と生活	11						
						10	婦人俱楽部	11						

1990年代前半(1990年～1994年)

45回<1990(平成2)年>			46回<1991(平成3)年>			47回<1992(平成4)年>			48回<1993(平成5)年>			49回<1994(平成6)年>		
順	誌名	862	順	誌名	870	順	誌名	848	順	誌名	728	順	誌名	713
1	家の光	144	1	家の光		1	家の光	106	1	家の光	113	1	家の光	116
2	主婦の友	38	2	現代農業		2	現代農業	21	2	現代農業	25	2	現代農業	22
3	現代農業	26	3	主婦の友		3	M O R E	18	2	N H K 趣味の園芸	25	3	すてきな奥さん	19
4	月刊少年マガジン	23	4	w i t h		4	月刊少年ジャンプ	15	4	月刊少年ジャンプ	21	4	N H K きょうの料理	15
5	P H P	22	4	文藝春秋		4	文藝春秋	15	5	文藝春秋	17	5	主婦の友	13
6	月刊少年ジャンプ	21	6	地上		6	主婦の友	13	5	主婦の友	17	6	文藝春秋	12
7	N H K 趣味の園芸	18	7	E S S E		7	月刊少年マガジン	12	7	w i t h	15	6	P H P	12
8	主婦と生活	15	8	月刊少年ジャンプ		7	E S S E	12	7	M O R E	15	8	E S S E	11
8	文藝春秋	15	8	月刊少年マガジン		9	新潮	10	9	月刊少年マガジン	13	8	C a n C a m	11
8	ミセス	15	10	N H K きょうの料理		9	w i t h	10	10	E S S E	12	8	N H K 趣味の園芸	11
			10	P H P				10	10	すてきな奥さん	12			

1990年代後半(1995年～1999年)

50回<1995(平成7)年>			51回<1996(平成8)年>			52回<1997(平成9)年>			53回<1998(平成10)年>			54回<1999(平成11)年>		
順	誌名	754	順	誌名	754	順	誌名	788	順	誌名	820	順	誌名	1146
1	家の光	111	1	家の光	115	1	家の光	104	1	家の光		1	家の光	154
2	現代農業	21	2	現代農業	29	2	現代農業	32	2	現代農業		2	現代農業	34
3	オレンジページ	18	3	N H K 趣味の園芸	22	3	N H K 趣味の園芸	16	3	主婦の友		3	N H K 趣味の園芸	21
4	n o n · n o	15	4	月刊少年マガジン	19	3	文藝春秋	16	3	すてきな奥さん		3	文藝春秋	21
4	M O R E	15	4	n o n · n o	19	5	主婦の友	14	5	文藝春秋		5	主婦の友	14
6	N H K きょうの料理	14	6	オレンジページ	17	6	n o n · n o	13	6	N H K 趣味の園芸		6	n o n · n o	13
6	主婦の友	14	7	主婦の友	16	7	レタスクラブ	12	6	オレンジページ		7	オレンジページ	12
8	N H K 趣味の園芸	13	8	文藝春秋	15	8	すてきな奥さん	11	8	N H K きょうの料理		7	E S S E	12
9	w i t h	12	8	N H K きょうの料理	15	8	月刊少年マガジン	11	8	w i t h		9	すてきな奥さん	11
10	文藝春秋	11	10	w i t h	13	8	w i t h	11	10	P H P		9	健康	11
						8	オレンジページ	11						
						8	E S S E	11						

読んでいる月刊誌ベスト10の推移＜毎号読む＋ときどき読む＞③

2000年代前半(2000年～2004年)

55回<2000(平成12)年>			56回<2001(平成13)年>			57回<2002(平成14)年>			58回<2003(平成15)年>			59回<2004(平成16)年>		
順	誌名	843	順	誌名	831	順	誌名	887	順	誌名	860	順	誌名	777
1	家の光	112	1	家の光	98	1	家の光	114	1	家の光	89	1	家の光	55
2	NHK趣味の園芸	25	2	現代農業	24	2	オレンジページ	24	2	現代農業	23	2	現代農業	25
3	現代農業	21	3	オレンジページ	18	3	現代農業	23	3	オレンジページ	19	3	オレンジページ	16
4	文藝春秋	16	4	E S S E	16	4	NHKきょうの料理	18	4	NHK趣味の園芸	16	4	NHKきょうの料理	13
5	オレンジページ	15	4	NHK趣味の園芸	16	4	NHK趣味の園芸	18	5	NHKきょうの料理	15	5	NHK趣味の園芸	12
5	婦人公論	15	6	NHKきょうの料理	15	6	文藝春秋	17	6	婦人公論	12	6	M O R E	9
7	E S S E	14	7	文藝春秋	13	7	主婦の友	14	7	P H P	11	6	文藝春秋	9
8	n o n · n o	11	8	婦人公論	12	7	婦人公論	14	7	クロワッサン	11	8	E S S E	7
9	月刊少年マガジン	10	8	レタスクラブ	12	9	E S S E	10	9	w i t h	10	8	レタスクラブ	7
9	主婦の友	10	10	M O R E	10	10	P H P	9	9	家庭画報	10	8	壮快	7
		10		すてきな奥さん	10									

2000年代後半(2005年～2009年)

60回<2005(平成17)年>			61回<2006(平成18)年>			62回<2007(平成19)年>			63回<2008(平成20)年>			64回<2009(平成21)年>		
順	誌名	773	順	誌名	870	順	誌名	892	順	誌名	865	順	誌名	884
1	家の光	84	1	家の光	60	1	家の光	46	1	家の光	64	1	家の光	45
2	現代農業	20	2	文藝春秋	22	2	現代農業	22	2	オレンジページ	21	2	オレンジページ	22
3	オレンジページ	16	3	オレンジページ	19	3	オレンジページ	20	3	E S S E	18	3	現代農業	16
4	E S S E	14	4	n o n · n o	15	4	NHK趣味の園芸	17	4	現代農業	17	4	レタスクラブ	15
5	文藝春秋	13	5	現代農業	14	4	E S S E	17	5	文藝春秋	15	5	NHK趣味の園芸	13
6	NHKきょうの料理	12	6	レタスクラブ	13	6	NHKきょうの料理	14	6	P H P	12	6	E S S E	11
7	NHK趣味の園芸	8	7	C a n C a m	12	7	サンキュー！	12	7	婦人公論	9	6	NHKきょうの料理	11
7	安心	8	7	E S S E	12	8	文藝春秋	10	7	月刊少年マガジン	9	6	文藝春秋	11
7	主婦の友	8	7	M O R E	12	8	レタスクラブ	10	7	NHK趣味の園芸	9	9	C a n C a m	7
10	M O R E	7	10	NHKきょうの料理	10	8	n o n · n o	10	10	クロワッサン	8	9	M O R E	7
10	レタスクラブ	7	10	NHK趣味の園芸	10	8	C a n C a m	10	10	NHKきょうの料理	8	9	婦人公論	7
10	婦人公論	7												

2010年代前半(2010年～2012年)

65回<2010(平成22)年>			66回<2011(平成23)年>			67回<2012(平成24)年>		
順	誌名	905	順	誌名	879	順	誌名	882
1	家の光	49	1	家の光	51	1	家の光	37
2	オレンジページ	22	2	オレンジページ	30	2	オレンジページ	23
3	E S S E	16	3	レタスクラブ	16	3	現代農業	19
4	文藝春秋	15	4	NHKきょうの料理	13	4	E S S E	16
5	NHK趣味の園芸	14	4	サンキュー！	13	5	NHK趣味の園芸	13
5	サンキュー！	14	6	E S S E	11	5	文藝春秋	13
5	現代農業	14	6	現代農業	11	7	レタスクラブ	11
8	NHKきょうの料理	12	8	M O R E	9	8	P R E S I D E N T	9
9	婦人公論	11	8	家庭画報	9	9	NHKきょうの料理	8
10	レタスクラブ	10	10	NHK趣味の園芸	8	9	婦人公論	8

## 週刊誌読書率から

週刊誌の読書率のグラフ（P 35 参照）は、1969年から始まり、2012年まである。ただし1999年のデータはない。

全体としては1969年から1988年ごろまで、グラフはおおむね水平のままだが、1989年から94年までがやや高くなる。水平部分に比べると、その差はおよそ10ポイントだ。95年、グラフは一転して降下し、上下を繰り返しながら右肩下がりになっていく。大まかに言うと、89年で10ポイントほど上がり、90年代後半で20ポイントほど下げた。それからの15年間でさらに15ポイント程度下げている。1970年代前半と2010年前後を比べると、20～25ポイントほどの低下だとわかる。週刊誌を読む人がこれだけ減っている。

男女別にみると、90年ごろを境に変化しているのがわかる。70年代、80年代は、おおむね男性のほうが読書率が高く、女性は低い。ポイント差は大きいときで10ポイントほどある。ただし、調査した年によっては女性のほうが高いときもある。

90年代前半は女性の読書率のほうが男性よりも高い。最大で11ポイント違う年もある。ところが2000年代になると男女差はほとんどなくなる。男性も女性も、ともに読書率が下がっていく。言い換えると、男性も女性も、週刊誌をあまり読まなくなっている。

もう少し細かくみてみよう。平坦に見える70年代、80年代も、小さな山と谷がある。山は1973年から76年ごろと、1979年から82年ごろである。1973年といえばオイルショックと異常インフレの年だった。狂乱物価などともいわれた。紙が不足してスーパーではトイレットペーパーを求める客が押し合いへし合ったが、出版界でも印刷用紙不足は深刻だった。74年は田中角栄が金脈問題で首相を辞任、76年はロッキード事件が広まって田中角栄逮捕に至る。政治経済では大きなニュースの多い時期だった。週刊誌で情報を得ようとした人々が多かったのもうなづける。

79年から82年には何が起きたのか。79年はグラマン・ダグラス事件で政界が大きく揺れた。海外では米中が国交を樹立し、イギリスではサッチャー政権が誕生した。韓国では朴正熙大統領が暗殺され、イランではホメイニ師が実権を把握した。

80年になると、韓国では光州事件が起き、中東ではイラン・イラク戦争が起きる。つまり後の韓国の民主化と経済的大躍進につながる事件があり、国際社会ではイスラム教の影響を無視できない時代になった。

81、82年に盛んにいわれたのは「行政改革」である。81年には行政改革推進本部が発足し、82年には臨時行政調査会が基本答申を提出した。アメリカでは81年にレーガン大統領が就任。サッチャー／レーガンの時代が来る。

次の山は90年代前半である。この山もよく見ると頂上が二つある。一つめの頂上は89年と90年で、もう一つの頂上は94年である。どちらも女性の読書率が男性を上回っている。

88～90年は、国内的にも世界的にも大変化の時期である。冷戦が終わり、昭和が終わった。また、「昭和の終わり」に際しては、石原裕次郎や美空ひばり、藤原寛美ら、昭和を体現

したスターたちが亡くなつていった。週刊誌、とりわけ女性週刊誌では、こうした芸能人（スター）の追悼記事がよく登場したから、そうしたことでも読書率を引き上げる要因となったのかもしれない。

もう一つの頂上、94年は何が起こつただろうか。前年の93年、宮澤喜一政権に替わつて日本新党の細川護熙を首相とする連立政権が誕生した。自民党政権が終わり、55年体制が終わつた。94年は首相が細川から羽田孜へ、そして村山富市へと目まぐるしく変わつた。円高が進み、バブル崩壊は明らかになり、景気後退が一時的なものではすまないことも明らかになってきた。一方、スポーツ界ではリレハンメル冬季オリンピックが開催され、貴乃花が横綱に昇進して若貴ブームが最高潮に達するなど大いに盛り上がつたのである。この年の読書率は男女差が11ポイントに達し、調査期間中でも最大のレベルである。

90年と94年に挟まれるようにして、92年は「谷」になっている。『出版データブック』には「バブル崩壊で休刊誌続出、出版社の大型倒産も話題に」と書かれている。雑誌にかかる大きなニュースとしては『朝日ジャーナル』の休刊があつた。

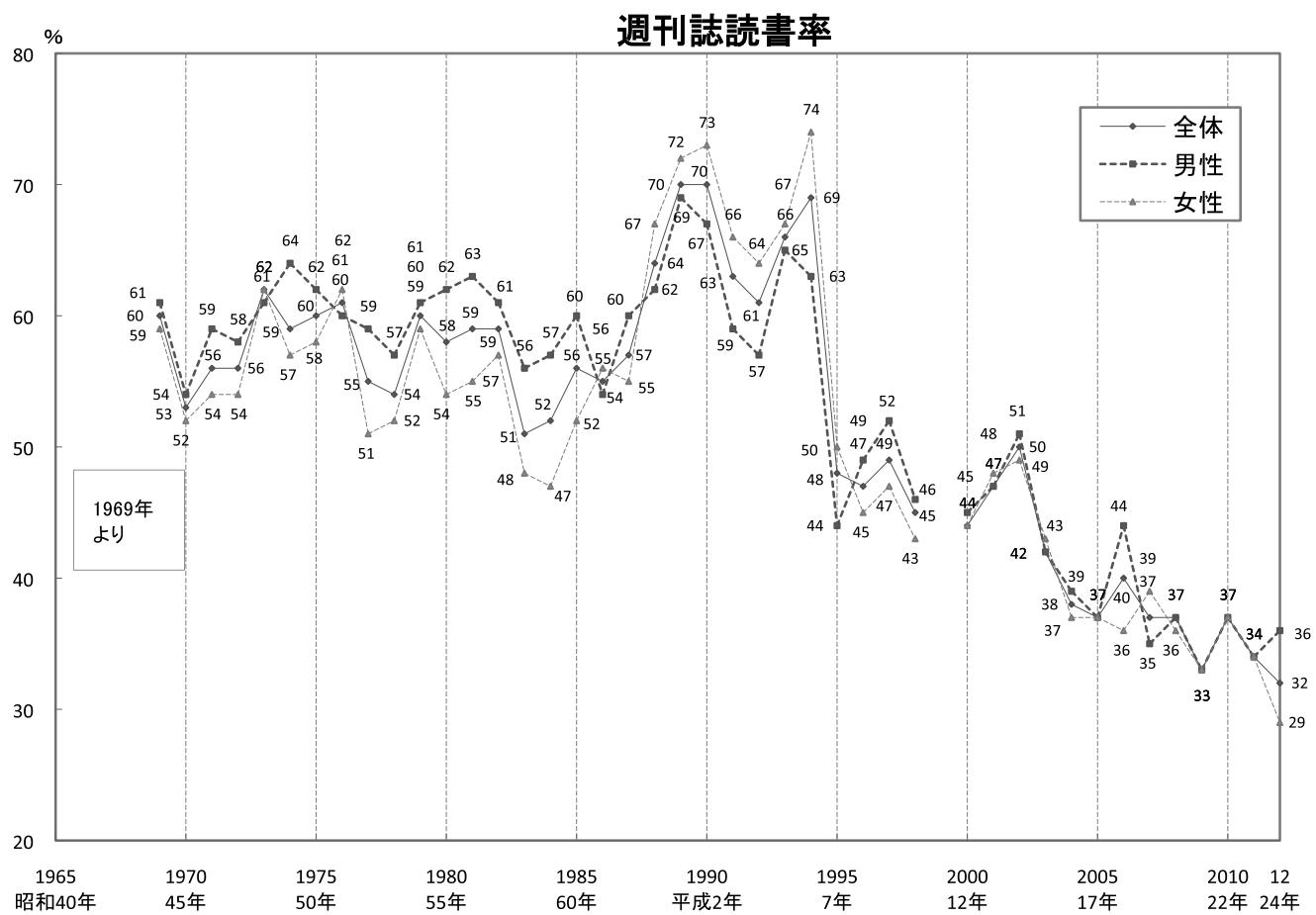
95年は好調だった前年から一転して週刊誌購読率は大きく下がる。95年は1月に阪神淡路大震災が発生し、3月には地下鉄サリン事件が起きた。大事故、大事件が起きると、印刷メディアは電波メディアに比べて遅いことが痛感された。

ただし、出版科学研究所の『出版指標年報』を見ると、全国の販売状況は必ずしも農村読書調査と一致しない。推定販売金額においても推定販売部数においても、95年は対前年比増減率でプラスなのだ。下げるのはむしろ翌96年からである。

先回りしていると、週刊誌の推定販売部数対前年比増減率は、この95年を最後にその後一度もプラスに転じていない。現在に至るまでずっと縮小し続けている。

農村読書調査のほうでは、97年と2002年に小さな「山」がある。97年は金融機関の経営破綻など、バブル崩壊と長期不況が明らかになつた年である。グラフも男性の読書率が女性を上回つてゐる。総合週刊誌で報じられる経済ニュースが読まれたということだろうか。2002年はFIFAワールドカップが日韓で共同開催されおおいに沸いた。鈴木宗男や辻元清美、田中真紀子ら有名政治家の逮捕や辞職が相次ぐなど、週刊誌の話題には事欠かない年だった。

しかしその後、週刊誌読書率は男女ともにほぼ一貫して下がり続けている。



## ◆週刊誌の変遷をひも解く

60年代、よく読まれている週刊誌は、『週刊朝日』や『サンデー毎日』など新聞社系の週刊誌だった（P37～39参照）。『週刊読売』や『週刊サンケイ』も同じ。新聞社系週刊誌の特徴は、芸能人や著名人のゴシップ、スキャンダルが少なく、茶の間で読めるような記事が多いことである。また、新聞販売店経由で定期購読している読者も少なくなかった。

『週刊平凡』も60年代の上位に登場する雑誌だ。こちらは兄貴分にあたる『月刊平凡』とは違って、芸能人のゴシップやスキャンダルの類もたびたび報じた。また、女性週刊誌の『女性自身』もランキング上位の常連だが、こちらも皇室記事と芸能人ゴシップ、性も含めた人間ドキュメントがコンテンツの柱。60年代の農村家庭で、『週刊朝日』と『週刊平凡』と『女性自身』がよく読まれていたというのは興味深い（もちろん同一の家庭で3誌を併読していたというよりも、『週刊朝日』を読む家庭と『週刊平凡』『女性自身』を読む家庭があった、ということだろう）。

70年代になると『週刊朝日』はトップの常連ではなくなる。替わって『女性自身』や『週刊平凡』、そのライバル誌である『週刊明星』がトップ争いをする。その一方で、『週刊新潮』や『週刊文春』、『週刊ポスト』『週刊現代』といった、出版社系の週刊誌が着実に勢力を伸ばしていく。また、79年には『週刊少年マガジン』が登場している。「右手に（朝日）ジャーナル、左手に（少年）マガジン」といわれたのは70年代の初めだが、都市の若者文化が農村にもひろまりつつあった。

80年代になると『週刊少年ジャンプ』『週刊少年マガジン』はベストテンの常連である。首位は『女性自身』がほぼ独占状態。85年は『FOCUS』が登場し、86年には『FRIDAY』も登場した。大手出版社は競って写真週刊誌を創刊し、ひところはその頭文字をとって3FET（FOCUS、FRIDAY、FLASH、ENMA、TOUCH）とも呼ばれた。

90年代になると、新聞社系週刊誌の退潮は明らかである。ランキングにはかろうじて『週刊朝日』が残るのみ。朝日新聞社からは『朝日ジャーナル』に替わって『AERA』が創刊されているのだが（88年）、農村読書調査のランキングには登場しない。

2000年代も首位は『女性自身』の定位置に。2位を男性読者が多いと思われる『週刊現代』と『週刊ポスト』が奪い合うようにし、ときどき『週刊文春』（読者の男女比は半々といわれる）や『週刊女性』が顔を出す。『週刊朝日』は7位から10位ぐらいまでが定位置だ。

じつは第三者機関による実売部数調査であるABC考査の数字は、農村読書調査の数字とは必ずしも一致しない。ABCの部数では『女性自身』よりも『週刊文春』や『週刊新潮』のほうがはるかに多い。なぜ農村では「女性自身」がよく読まれているのか、はっきりした原因はわからないが、ライフスタイルの違いによるのかもしれない。

## 読んでいる週刊誌ベスト10の推移<毎号読む+ときどき読む>①

1960年代前半(1960年～1964年)

15回<1960(昭和35)年>			16回<1961(昭和36)年>			17回<1962(昭和37)年>			18回<1963(昭和38)年>			19回<1964(昭和39)年>		
順	誌名	2587	順	誌名	2575	順	誌名	1279	順	誌名	2618	順	誌名	1335
1	週刊朝日	431	1	週刊朝日	357	1	週刊平凡	160	1	週刊朝日	280	1	週刊朝日	168
2	サンデー毎日	332	2	サンデー毎日	310	2	週刊朝日	146	2	週刊平凡	232	2	週刊平凡	134
3	女性自身	174	3	週刊平凡	250	3	サンデー毎日	123	3	サンデー毎日	225	3	サンデー毎日	94
4	週刊読売	157	4	女性自身	161	4	週刊明星	106	4	女性自身	178	4	女性自身	84
5	週刊平凡	153	5	週刊明星	159	5	女性自身	94	5	週刊明星	168	5	週刊明星	78
6	週刊女性	133	6	週刊読売	127	6	週刊読売	58	6	週刊読売	124	6	週刊読売	55
7	週刊サンケイ	105	7	週刊サンケイ	100	7	週刊新潮	44	7	週刊新潮	88	7	週刊サンケイ	34
8	週刊実話	104	7	週刊女性	100	8	週刊女性	30	8	週刊読売スポーツ	69	8	週刊新潮	30
9	週刊明星	67+α	9	週刊文春	95	9	週刊サンケイ	25	9	週刊サンケイ	59	9	週刊女性	27
10	週刊新潮	64	10	週刊新潮	92	10	週刊実話	24	10	週刊女性	57	9	週刊文春	27

1960年代後半(1965年～1969年)

20回<1965(昭和40)年>			21回<1966(昭和41)年>			22回<1967(昭和42)年>			23回<1968(昭和43)年>			24回<1969(昭和44)年>		
順	誌名	1384	順	誌名	1383	順	誌名	1320	順	誌名	1301	順	誌名	1286
1	週刊朝日	157	1	週刊平凡	124	1	週刊平凡	126	1	週刊朝日	121	1	女性自身	171
2	週刊平凡	137	2	週刊朝日	120	2	週刊朝日	109	2	週刊平凡	120	2	週刊平凡	161
3	女性自身	113	3	女性自身	89	3	週刊明星	95	3	女性自身	99	3	週刊朝日	114
4	サンデー毎日	111	4	週刊明星	86	4	女性自身	84	4	週刊明星	98	4	週刊明星	108
5	週刊明星	102	5	サンデー毎日	68	5	サンデー毎日	74	5	サンデー毎日	69	5	サンデー毎日	85
6	週刊サンケイ	54	6	週刊読売	55	6	週刊新潮	60	6	ヤングレディ	60	6	ヤングレディ	64
7	週刊読売	52	7	週刊新潮	50	7	週刊読売	51	7	週刊読売	53	7	女性セブン	61
8	週刊新潮	45	8	ヤングレディ	42	8	ヤングレディ	49	8	週刊現代	42	8	週刊読売	49
9	週刊文春	39	9	週刊サンケイ	37	9	平凡パンチ	48	9	女性セブン	39	9	週刊新潮	44
10	ヤングレディ	36	9	週刊文春	37	10	週刊現代	39	10	週刊新潮	37	10	週刊現代	41

1970年代前半(1970年～1974年)

25回<1970(昭和45)年>			26回<1971(昭和46)年>			27回<1972(昭和47)年>			28回<1973(昭和48)年>			29回<1974(昭和49)年>		
順	誌名	861	順	誌名	862	順	誌名	848	順	誌名	840	順	誌名	812
1	週刊平凡	84	1	週刊平凡	111	1	週刊平凡	64	1	週刊平凡	80	1	週刊明星	57
2	女性自身	68	2	女性自身	86	2	週刊朝日	49	2	週刊朝日	61	2	週刊平凡	56
3	週刊朝日	63	3	週刊明星	73	2	週刊明星	49	3	女性自身	57	3	女性自身	53
4	サンデー毎日	57	4	週刊朝日	52	4	女性自身	34	3	週刊明星	57	4	週刊女性	34
5	週刊明星	44	5	サンデー毎日	41	5	女性セブン	31	5	週刊現代	36	5	女性セブン	33
6	女性セブン	37	6	週刊女性	37	6	週刊新潮	30	6	女性セブン	35	6	週刊朝日	32
7	週刊新潮	35	7	女性セブン	36	7	サンデー毎日	29	7	週刊女性	33	7	週刊現代	24
8	週刊女性	29	8	週刊現代	33	8	週刊女性	22	8	サンデー毎日	31	8	週刊新潮	23
9	ヤングレディ	27	9	週刊新潮	26	9	週刊現代	17	9	週刊新潮	28	9	サンデー毎日	21
10	週刊現代	24	10	週刊読売	23	10	ヤングレディ	14	10	平凡パンチ	17	10	平凡パンチ	18
	週刊文春	24							10	週刊ポスト	17			

1970年代後半(1975年～1979年)

30回<1975(昭和50)年>			31回<1976(昭和51)年>			32回<1977(昭和52)年>			33回<1978(昭和53)年>			34回<1979(昭和54)年>		
順	誌名	840	順	誌名	843	順	誌名	861	順	誌名	871	順	誌名	866
1	女性自身	64	1	週刊明星	50	1	週刊平凡	52	1	週刊平凡	87	1	女性自身	75
2	週刊平凡	57	2	週刊平凡	49	2	女性自身	49	2	週刊明星	63	2	週刊平凡	67
3	週刊明星	47	3	女性自身	47	3	週刊朝日	47	3	女性自身	61	3	週刊朝日	61
3	週刊朝日	47	4	週刊朝日	41	4	週刊明星	41	4	週刊朝日	53	4	週刊明星	49
5	女性セブン	34	5	週刊女性	35	5	週刊現代	35	5	週刊新潮	36	5	週刊新潮	37
6	週刊女性	28	6	週刊現代	34	6	週刊新潮	32	6	週刊女性	35	6	週刊女性	34
7	週刊新潮	27	7	サンデー毎日	31	7	週刊女性	28	7	週刊現代	31	7	サンデー毎日	31
8	週刊現代	25	8	週刊文春	29	8	サンデー毎日	21	8	女性セブン	22	8	週刊少年マガジン	25
9	ヤングレディ	23	9	週刊読売	27	9	n o n · n o	20	9	週刊プレイボーイ	19	8	週刊ポスト	25
10	サンデー毎日	21	10	週刊ポスト	25	9	週刊ポスト	20	10	サンデー毎日	18	10	週刊現代	22
	週刊文春	21				9	週刊読売	20						

## 読んでいる週刊誌ベスト10の推移<毎号読む+ときどき読む>②

### 1980年代前半(1980年～1984年)

35回<1980(昭和55)年>			36回<1981(昭和56)年>			37回<1982(昭和57)年>			38回<1983(昭和58)年>			39回<1984(昭和59)年>		
順	誌名	860	順	誌名	898	順	誌名	860	順	誌名	892	順	誌名	892
1	週刊朝日	74	1	女性自身	90	1	女性自身	73	1	女性自身	64	1	女性自身	66
2	週刊平凡	71	2	週刊平凡	62	2	週刊現代	48	2	週刊明星	39	2	週刊少年ジャンプ	51
3	女性自身	64	3	週刊ポスト	50	3	週刊現代	41	3	週刊朝日	35	3	週刊朝日	47
4	週刊女性	42	4	週刊現代	49	4	週刊明星	39	4	週刊少年ジャンプ	32	4	週刊女性	40
5	週刊現代	37	5	週刊新潮	44	5	週刊女性	34	5	週刊現代	31	5	女性セブン	37
6	週刊ポスト	33	6	週刊女性	44	6	週刊ポスト	33	6	週刊平凡	29	5	週刊少年マガジン	37
7	週刊明星	32	7	週刊明星	42	7	週刊朝日	32	7	週刊女性	27	7	週刊平凡	31
8	週刊新潮	30	8	週刊朝日	37	8	週刊少年ジャンプ	30	7	週刊新潮	27	7	週刊ポスト	31
9	週刊少年ジャンプ	27	9	週刊少年ジャンプ	36	9	週刊少年マガジン	29	7	週刊プレイボーイ	27	9	週刊現代	30
9	サンデー毎日	27	10	n o n · n o	35	10	女性セブン	26	10	女性セブン	24	10	週刊新潮	27

### 1980年代後半(1985年～1989年)

40回<1985(昭和60)年>			41回<1986(昭和61)年>			42回<1987(昭和62)年>			43回<1988(昭和63)年>			44回<1989(平成元)年>		
順	誌名	983	順	誌名	882	順	誌名	873	順	誌名	889	順	誌名	898
1	女性自身	79	1	女性自身	80	1	女性自身	105	1	女性自身		1	女性自身	150
2	週刊少年ジャンプ	66	2	週刊女性	53	2	週刊ポスト	49	2	週刊少年ジャンプ		2	女性セブン	94
3	週刊朝日	57	3	週刊現代	47	3	週刊女性	41	3	週刊女性		3	週刊少年ジャンプ	71
4	週刊明星	45	4	週刊朝日	42	4	女性セブン	39	4	女性セブン		4	週刊女性	70
5	週刊ポスト	44	5	週刊少年ジャンプ	41	5	週刊少年ジャンプ	38	5	週刊少年マガジン		5	週刊明星	44
6	FOCUS	42	6	女性セブン	39	6	FOCUS	31	6	週刊現代		5	FOCUS	44
7	週刊現代	40	7	FOCUS	35	7	週刊明星	30	7	週刊ポスト		5	F R I D A Y	44
8	週刊女性	38	8	週刊明星	31	8	F R I D A Y	26	8	週刊朝日		8	週刊朝日	43
9	週刊平凡	36	9	週刊ポスト	27	9	週刊現代	25	8	週刊少年サンデー		9	週刊現代	42
10	週刊少年マガジン	34	10	週刊平凡	22	10	n o n · n o	23	10	n o n · n o		10	週刊ポスト	41
					10		F R I D A Y	22						

### 1990年代前半(1990年～1994年)

45回<1990(平成2)年>			46回<1991(平成3)年>			47回<1992(平成4)年>			48回<1993(平成5)年>			49回<1994(平成6)年>		
順	誌名	862	順	誌名	870	順	誌名	848	順	誌名	728	順	誌名	713
1	女性自身		1	女性自身		1	女性自身	119	1	女性自身	105	1	女性自身	112
2	週刊女性		2	女性セブン		2	週刊少年ジャンプ	62	2	週刊女性	71	2	週刊女性	63
3	週刊少年ジャンプ		3	週刊現代		3	女性セブン	58	3	週刊少年ジャンプ	66	3	週刊ポスト	61
4	女性セブン		4	週刊少年ジャンプ		3	週刊現代	58	4	女性セブン	60	4	週刊現代	55
5	週刊現代		5	週刊女性		5	週刊女性	48	5	週刊現代	59	5	女性セブン	48
6	週刊ポスト		6	週刊朝日		6	週刊ポスト	41	6	週刊ポスト	51	6	週刊文春	42
7	週刊少年マガジン		7	週刊ポスト		7	n o n · n o	40	7	週刊朝日	42	6	週刊少年ジャンプ	42
8	週刊朝日		8	週刊文春		8	オレンジページ	29	8	週刊文春	39	8	週刊朝日	34
9	F R I D A Y		8	FOCUS		9	週刊朝日	26	9	週刊少年マガジン	31	9	週刊少年マガジン	33
10	週刊新潮		8	F R I D A Y		10	週刊少年マガジン	21	10	週刊新潮	27	10	オレンジページ	27

### 1990年代後半(1995年～1999年)

50回<1995(平成7)年>			51回<1996(平成8)年>			52回<1997(平成9)年>			53回<1998(平成10)年>			54回<1999(平成11)年>		
順	誌名	754	順	誌名	791	順	誌名	788	順	誌名	820	順	誌名	1146
1	女性自身	88	1	女性自身	70	1	女性自身	58	1	女性自身		1	女性自身	73
2	週刊現代	48	2	週刊現代	60	2	週刊現代	57	2	週刊現代		2	週刊現代	52
3	週刊女性	46	3	週刊女性	41	3	週刊ポスト	53	3	週刊ポスト		3	週刊女性	41
4	週刊ポスト	43	4	週刊少年ジャンプ	39	4	週刊女性	36	4	週刊少年マガジン		4	週刊ポスト	36
5	女性セブン	36	5	週刊ポスト	37	5	週刊少年マガジン	34	5	週刊少年ジャンプ		5	女性セブン	34
6	週刊少年ジャンプ	32	6	週刊少年マガジン	28	6	週刊文春	27	6	週刊女性		6	週刊少年マガジン	33
7	週刊朝日	31	7	週刊文春	25	6	週刊朝日	27	7	週刊新潮		7	週刊文春	30
8	週刊文春	27	7	週刊朝日	25	8	女性セブン	26	7	週刊文春		8	週刊少年ジャンプ	29
9	週刊新潮	19	9	週刊新潮	23	9	週刊新潮	22	9	週刊朝日		8	週刊新潮	29
10	週刊宝石	16	10	女性セブン	22	10	F R I D A Y	13	10	女性セブン		10	週刊朝日	26
10	週刊少年マガジン	16												

### 読んでいる週刊誌ベスト10の推移＜毎号読む＋ときどき読む＞③

2000年代前半(2000年～2004年)

55回<2000(平成12)年>			56回<2001(平成13)年>			57回<2002(平成14)年>			58回<2003(平成15)年>			59回<2004(平成16)年>		
順	誌名	843	順	誌名	831	順	誌名	887	順	誌名	860	順	誌名	777
1	女性自身	64	1	女性自身	68	1	女性自身	49	1	女性自身	70	1	女性自身	57
2	週刊現代	57	2	週刊現代	47	2	週刊女性	47	2	週刊ポスト	49	2	週刊現代	41
3	週刊女性	38	3	週刊ポスト	47	3	週刊現代	44	2	週刊現代	49	3	週刊ポスト	32
3	女性セブン	38	4	週刊女性	45	4	週刊文春	34	4	週刊女性	38	4	週刊文春	31
5	週刊少年ジャンプ	34	5	女性セブン	37	5	週刊ポスト	32	5	週刊新潮	37	5	週刊女性	28
6	週刊ポスト	33	6	週刊文春	35	6	女性セブン	29	5	女性セブン	37	5	女性セブン	28
7	週刊朝日	29	7	週刊少年ジャンプ	34	7	週刊少年ジャンプ	28	7	週刊文春	30	7	週刊少年ジャンプ	23
7	週刊新潮	29	8	週刊少年マガジン	32	8	週刊少年マガジン	24	8	週刊朝日	23	8	週刊新潮	21
9	週刊少年マガジン	28	8	週刊新潮	31	8	週刊新潮	24	9	週刊少年マガジン	22	9	週刊朝日	18
10	週刊文春	26	10	週刊朝日	19	10	週刊朝日	20	10	週刊少年ジャンプ	18	10	週刊少年マガジン	17

2000年代後半(2005年～2009年)

60回<2005(平成17)年>			61回<2006(平成18)年>			62回<2007(平成19)年>			63回<2008(平成20)年>			64回<2009(平成21)年>		
順	誌名	773	順	誌名	870	順	誌名	892	順	誌名	865	順	誌名	884
1	女性自身	46	1	女性自身	59	1	女性自身	76	1	女性自身	64	1	女性自身	50
2	週刊現代	35	2	週刊文春	58	2	週刊女性	42	2	週刊女性	42	2	週刊現代	40
3	週刊文春	34	3	週刊現代	42	3	週刊現代	40	3	週刊現代	39	3	週刊女性	32
4	週刊ポスト	33	4	週刊少年ジャンプ	38	4	週刊少年ジャンプ	37	4	週刊文春	35	3	週刊少年ジャンプ	32
4	女性セブン	33	5	週刊新潮	34	5	週刊文春	35	5	週刊ポスト	29	5	週刊ポスト	29
6	週刊新潮	31	6	週刊女性	30	6	女性セブン	34	6	週刊少年ジャンプ	28	6	週刊新潮	23
7	週刊朝日	24	7	女性セブン	26	7	週刊少年マガジン	29	7	女性セブン	27	7	週刊文春	22
8	週刊女性	23	8	週刊朝日	24	7	週刊新潮	29	8	週刊朝日	24	8	週刊少年マガジン	19
9	週刊少年ジャンプ	20	9	週刊ポスト	23	9	週刊朝日	28	8	週刊新潮	24	8	女性セブン	19
10	サンデー毎日	8	10	週刊少年マガジン	20	10	週刊ポスト	23	10	週刊少年マガジン	18	10	週刊朝日	13
10	週刊少年マガジン	8												

2010年代前半(2010年～2012年)

65回<2010(平成22)年>			66回<2011(平成23)年>			67回<2012(平成24)年>		
順	誌名	905	順	誌名	879	順	誌名	882
1	女性自身	56	1	女性自身	53	1	週刊現代	48
2	週刊少年ジャンプ	53	2	週刊少年ジャンプ	44	2	週刊文春	36
3	週刊現代	49	3	週刊現代	42	3	週刊ポスト	35
4	週刊女性	33	4	週刊女性	34	3	週刊少年ジャンプ	35
4	週刊文春	33	4	女性セブン	34	5	女性自身	33
6	女性セブン	32	6	週刊文春	30	6	女性セブン	31
7	週刊新潮	27	7	週刊ポスト	26	7	週刊女性	27
8	週刊ポスト	24	8	週刊少年マガジン	23	8	週刊新潮	26
9	週刊少年マガジン	20	9	週刊新潮	21	9	週刊朝日	16
10	週刊少年サンデー	12	10	週刊朝日	14	10	週刊少年マガジン	13

## 書籍読書率から

書籍読書率は1960年から2012年まである。ただし1999年は欠けている（P42参照）。

全体を見回すと、グラフの線の上下幅が非常に大きいのに気づく。1年で5ポイント以上、ときには10ポイント近く上下することも珍しくない。たとえば1992年は全体で41%だったが、翌93年は54%と13ポイントも上昇している。総合読書率の項でも述べたように、前年比で「読書率が上がった」「読書率が下がった」と語ることには、ほとんど意味はない。激しく上下を繰り返しながら全体としてどのような傾向にあるのか、上下に振れながら回帰しようとしている平均値はどのへんにあるのかを見ていかなければならない。

グラフの平均的なところをイメージしながらみていくと、左端、つまり1960年ごろは低く、徐々に高まっていくのがわかる。だいたい1970年代ごろで上昇はいったん止まり、水平になる。90年代後半から新世紀にかけて下り坂になり、新世紀に入ってからは横ばいになるとみることができる。もちろん「水平」部分の中での上下をみることも可能だ。

これは「読書離れが進んでいる」と一般にいわれている印象とは少し違う。一般に「読書離れ」といわれるときは、過去にさかのぼればさかのぼるほど人々は本をよく読んでいて、時代が下るにつれて読まなくなってきたとイメージされる。しかし書籍読書率でみると、1960年代よりも1980年代、1990年代のほうが（日本の農村に住む）人は書籍をよく読んでいた。新世紀に入ると90年代に比べて10～15ポイント程度、読書率が下がっているとみることができるが、それでも1960年代よりは高い。いまやクリシェと化した「読書離れ」であるが、このデータだけからではそう断言できない。

もう一つ注目したいのは男女差である。ここでも月刊誌や週刊誌、あるいは総合読書率の変化と共通した現象がみられる。1960年代から1980年ごろまでは、男性の読書率のほうが高い年が多い。まれに交差する年もあるが、おおむね5ポイントから8ポイントぐらい男性の方が高い。つまり男性の方が書籍をよく読んでいた。ところが80年ごろから男女差はあまり明確でなくなる。ポイント差も縮まるし、女性の読書率が男性を上回る年も珍しくなる。さらに90年代になると、明らかに女性の読書率のほうが男性よりも高くなる。2004年のように、その差が15ポイントも広がる年が出てくる。

いわゆる「読書離れ」を男女別にみると、男性についてはある程度いえるかもしれないが、女性については当てはまらない。

それでも不思議なのは、ときには交差しながらも、男女のグラフはほぼ同じ動きを見せているということだ。いくつかの例外はあるものの、男性の読書率が高い年は女性も高く、女性の読書率が低い年は男性も低い。したがって、男女差はあるものの、読書というのは性差を越えて広く行われるものだと考えていいだろう。

グラフが跳ね上がった年と、世の中の動きなどについて振り返ってみたい。まず1964、65年。64年は東京オリンピックの年で、『愛と死をみつめて』が記録的なベストセラーとなった。オリンピック関連書もよく売れた。書籍読書率とはあまり関係ないだろうが、百科

事典や文学全集がヒットした時期もある。これは割賦販売（月賦による支払い）が確立したことでも大きい。販売された百科事典や全集がどれほど読まれたかは不明だが、近代的な核家族のリビングルームには不可欠なインテリアだった。

1968年は日本だけでなく、フランスやアメリカなど世界じゅうの先進国で若者の反乱が起きた年だった。ベストセラーは北杜夫の『どくとるマンボウ青春記』。光文社のカッパブックス（新書）がヒットを連発していた。

1973年はドルショック、オイルショックで狂乱物価といわれた。政治的にも安定しなかった。そんななか社会の不安に呼応するかのように空前の大ベストセラーとなったのが小松左京のSF、『日本沈没』だった。また、文庫が次々と創刊され、読書のスタンダードが文庫になっていくのもこのころから。

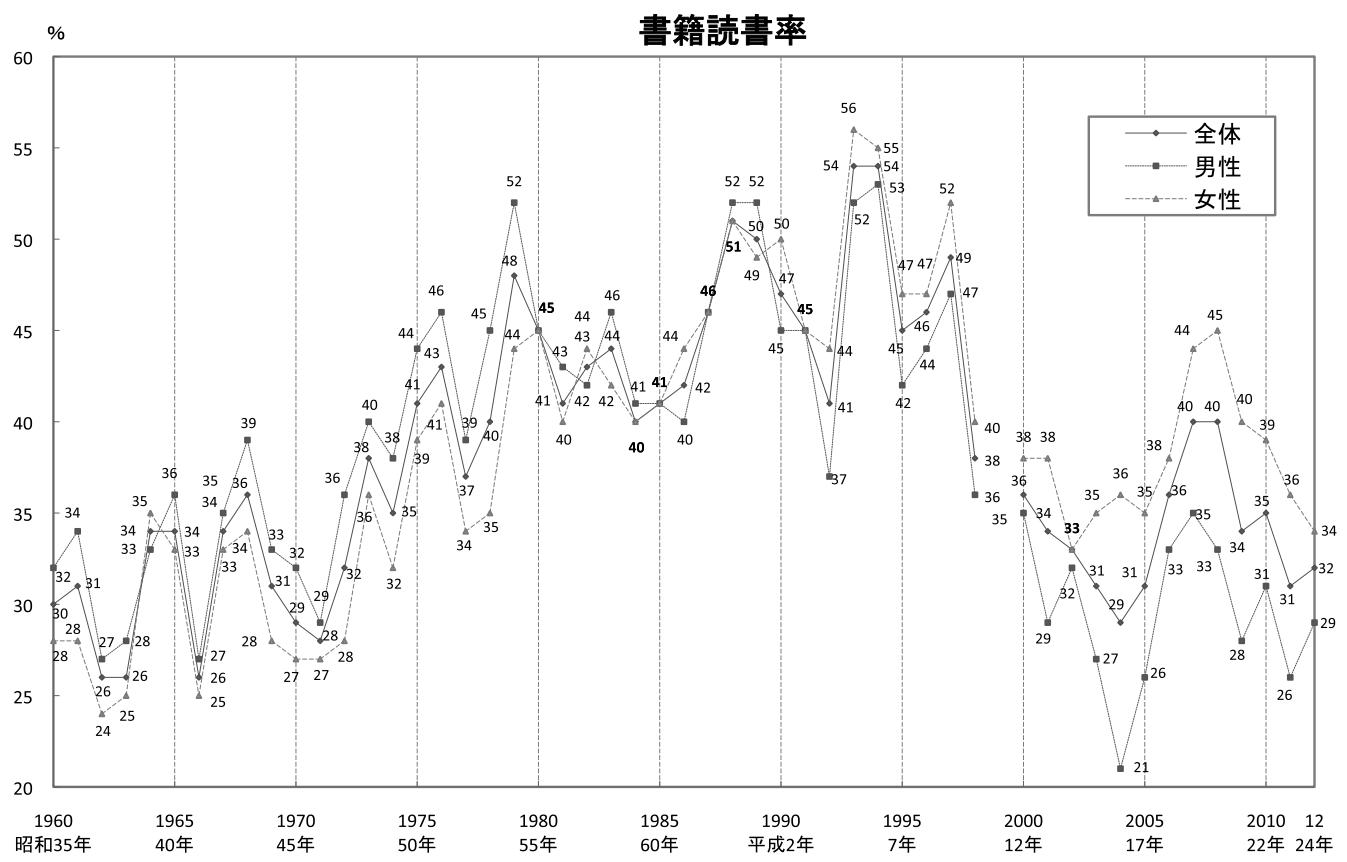
1976年は出版不況の年で「売れゆき低調、返品増大」（『出版データブック』）といわれるが、農村読書調査の書籍読書率は全体で43%と高い。この年は村上龍『限りなく透明に近いブルー』が芥川賞を受賞し、ミリオンセラーになった。映画の宣伝を大量に流して、原作の文庫も売るという、角川書店のメディアミックス路線もこのころ始まる。

1979年も読書率は高い。和泉宗章の『天中殺入門』が大ヒットして占いブームが起きた。ちなみに和泉はのちにこの本を間違っていたといい、占い否定派になる。

次のピークは1988年、89年である。村上春樹『ノルウェイの森』、『ダンス、ダンス、ダンス』、吉本ばなな（現・よしもとばなな）『キッチン』『TUGUMI』が大ヒットした。「春樹・ばななの時代」などともいわれる。日本の書籍の推定販売部数が最大になるのはこのころである（これ以降、縮小に向かう）。

農村読書調査で書籍読書率が最高値を示すのは1993、94年である（54%）。不況といわれながらも、ミリオンセラーがよく出た。ウォーラー『マディソン郡の橋』、永六輔『大往生』など。マンガ「サザエさん」の研究本である『磯野家の謎』がヒットして、謎本ブームも起きた。中野孝次『清貧の思想』などもある。

新世紀に入ると、出版界ではメガヒットが増えていく。売れるものだけに集中する一極化現象などともいわれる。しかし農村読書調査を見る限り、その影響はさほど大きくなかった。グラフでは2007、08年が高くなっている。『女性の品格』、『ホームレス中学生』、『鈍感力』、『ハリー・ポッター』シリーズ、『夢をかなえるゾウ』、血液型本などが大ヒットした年だった。ただ、先述したように、このころから読書率の男女差は大きくなる。男性が女性に比べてあまり読まなくなるのだ。なるほど世間でヒットしたタイトルを見ると、女性がヒットを支えていると納得もする。



## ◆読んだ書籍ベストテンをひも解く

読んだ書籍ベストテンの推移をみると、日本の農村の変化がよくわかる（P 45～47参照）。それはひとくちに言えば農村の都市化であろうし、ポップカルチャー、サブカルチャーの一般化ということであろう。

1960年から1962年までの3年間、ベストテンの1位は『人間の条件』である。太平洋戦争に運命を翻弄される市民を描いたこの作品は、新書（今でいうノベルス）で6巻本という大作である。それが3年連続で1位ということも興味深いが、じつはこの本が全国でベストセラーの1位になったのは1958年だった。全国での60年、61年、62年の1位は、それぞれ『性生活の知恵』、『英語に強くなる本』、『易入門』である（データは『出版指標年報』による）。なかでも謝国権の『性生活の知恵』は戦後出版史のなかで必ず語られる本なのだが、農村読書調査にはチラとも登場しない。このあたり、情報の伝播（あるいは消費）のスピードの違いと、農村における文化の違いを感じさせる。

また、文化の違いといえば、『坊ちゃん』、『暗夜行路』、『友情』、『破戒』といった古典的名作、『女の一生』、『戦争と平和』、『赤と黒』など、海外文学の古典的名作もランキングに顔を出している。ある種の教養主義的な匂いを感じる。

それでも、大ベストセラーになり、映画化され、テーマ曲もヒットした『愛と死をみつめて』や、東京オリンピック女子バレー（東洋の魔女！）で活躍した監督のエッセイ『おれについてこい』など、この時代、話題になった本もランクインしている。

70年代になるとテレビの影響が表れる。70年の1位、2位は『樅の木は残った』、『天地と』。いずれもNHK大河ドラマの原作である。その一方で、『坊ちゃん』、『こころ』、『三四郎』などの漱石作品、『雪国』、『伊豆の踊子』などの川端康成作品、『人間失格』、『斜陽』などの太宰治作品もランキングにはある。古典的名作を読む人びとが農村には一定数存在し続けたのだ。71年の4位が『源氏物語』というのも驚く。

時代ががらりと変わるのが1977年だ。1位は『犬神家の一族』。角川書店が映画とのメディアミックス・ビジネスを仕掛けた1冊である。この年、『獄門島』、『悪魔の手毬歌』もランクインしている。78年、79年の1位も映画化された『人間の証明』。テレビで大量宣伝された映画の原作本が都市でも農村でも読まれる時代が来た。もっとも、それでも漱石の小説は90年代になってもときどき登場する。恐るべし、夏目漱石。

80年代前半は『窓ぎわのトットちゃん』や『ノストラダムスの大予言』、『気くばりのすすめ』など、全国で話題になった本が農村でも読まれている。ただし「時間差」は短くなつたがまだ存在している。たとえば『窓ぎわのトットちゃん』が記録的ヒットとなったのは81年。農村読書調査でも1位だ。しかし全国のデータでは翌82年は3位になり、83年にはベストテンから姿を消している。ところが農村読書調査では82年1位、83年2位、84年4位と、息の長さを感じる。ベストセラーの賞味期間（というのもイヤないいかただが）が、農村では長いのかもしれない。

次の事件は1984年である。『みゆき』が8位に登場している。コミックが読んだ書籍ベストテンに登場するようになったのだ。翌85年には『タッチ』、『ゴルゴ13』、『ビーバッ

『ハイスクール』、『みゆき』の4点がランクインしている。もともとコミックは都市の文化だった。というのも、東京や大阪など大都市の貸本屋から生まれたからである。それが60年代に少年コミック誌、少女コミック誌の市場が広がり、貸本屋はすたれていった。そのコミック文化が農村にまで広がっていったのが80年代である。

この時期、郊外のバイパス沿いなどに広い店舗と広い駐車場を備えた郊外型書店が全国に登場した。品ぞろえの柱は雑誌と文庫、そしてコミックスである。農村でコミックが読まれるようになった背景には、こうしたインフラ面での変化もある。

90年代になると、ランキングリストの顔ぶれは全国のベストセラーとそれほど変わらない。村上春樹、吉本ばなな（現・よしもとばなな）、赤川次郎、さくらももこ……。ただひとつ違うのは、『徳川家康』（おそらくは山岡荘八版）、『三国志』（おそらくは吉川英治版）、『武田信玄』（おそらくは新田次郎版）など、歴史小説が常にランクインしていることである。これらは新刊ではない。長く読み継がれてきたのだ。NHK大河ドラマ関連と思われるタイトルがちらほらとランクインしているのも、農村読者の歴史好きを感じさせる。

しかし、2000年代に入ってから、この歴史小説の一群がほとんど姿を消してしまう。大河ドラマ関係もめったに登場しない（大河の視聴率低迷と関係あるのか？）。替わって上位にあるのは『五体不満足』や「ハリー・ポッター」シリーズ、『世界の中心で、愛をさけぶ』など、全国的にヒットしてテレビなどでも話題になることが多かった作品である。全国のランキングとの時間差もほとんどなくなった。『沈まぬ太陽』や『冬のソナタ』など、映像化された作品がよく読まれているのも、全国的な傾向である。2001年からはほぼ毎年のようにコミック『ONE PIECE』が登場している。もちろん同じ作品が読み継がれているのではなく、新しい巻が次々と出ているのだ。その点はかつて60年代に『人間の条件』が何年も連続してランキングされたり、80年代に『窓ぎわのトットちゃん』が読み続けられたのとは違う。

2010年代（といっても、3年分だけだが）をみると、少なくとも情報環境における農村部の都市化は完成したという思いを強くする。大都市とほとんど変わらない情報生活が現代の農村にはある。

## 1年間に読んだ書籍ベスト10の推移①

1960年代前半(1960年～1964年)

15回<1960(昭和35)年>			16回<1961(昭和36)年>			17回<1962(昭和37)年>			18回<1963(昭和38)年>			19回<1964(昭和39)年>		
順	書名	2587	順	書名	2575	順	書名	1279	順	書名	2618	順	書名	1335
1	人間の条件	51	1	人間の条件	40	1	人間の条件	14	1	点と線	17	1	愛と死をみつめて	24
2	人間の壁	22	2	宮本武蔵	30	2	宮本武蔵	7	2	坊ちゃん	16	2	徳川家康	16
3	坊ちゃん	21	3	何でも見てやろう	29	2	破 戒	7	3	人間の条件	13	3	人間の条件	15
4	氷 壁	18	4	女の一生	19	4	点と線	6	4	女の一生	12	3	坊ちゃん	15
5	宮本武蔵	15	5	陽のあたる坂道	15	4	新平家物語	6	5	破 戒	11	5	女の一生	13
6	新平家物語	14	6	暗夜行路	14	6	若い人	5	5	友 情	11	6	風と共に去りぬ	12
6	陽のあたる坂道	14	6	坊ちゃん	14	7	坊ちゃん	4	7	若い人	10	7	点と線	11
8	挽 歌	13	8	点と線	13	7	友 情	4	7	徳川家康	10	8	破 戒	10
9	暗夜行路	12	8	若い人	13	7	雁の寺	4	9	伊豆の踊子	7	8	友 情	10
10	青い山脈	11	10	友 情	11	7	愛と死のかたみ	4	9	陽のあたる坂道	7	10	若い人	9
		10	黒い画集	11										

1960年代後半(1965年～1969年)

20回<1965(昭和40)年>			21回<1966(昭和41)年>			22回<1967(昭和42)年>			23回<1968(昭和43)年>			24回<1969(昭和44)年>		
順	書名	1384	順	書名	1383	順	書名	1320	順	書名	1301	順	書名	1286
1	愛と死をみつめて	27	1	氷 点	26	1	女の一生	11	1	坊ちゃん	17	1	雪 国	17
2	徳川家康	26	2	坊ちゃん	15	1	風と共に去りぬ	11	2	戦争と平和	11	1	天と地と	17
3	坊ちゃん	16	3	風と共に去りぬ	11	3	徳川家康	10	3	徳川家康	10	3	女の一生	12
4	宮本武蔵	11	4	戦争と平和	10	3	氷 点	10	4	狹き門	7	4	戦争と平和	11
5	女の一生	9	5	宮本武蔵	8	5	嵐ヶ丘	9	4	嵐ヶ丘	7	4	坊ちゃん	11
5	うず潮	9	5	徳川家康	8	5	坊ちゃん	9	4	風と共に去りぬ	7	6	徳川家康	10
5	風と共に去りぬ	9	7	愛と死をみつめて	7	7	宮本武蔵	8	4	白い巨搭	7	7	嵐ヶ丘	8
5	太閤記	9	7	赤と黒	7	8	戦争と平和	7	4	暗夜行路	7	8	日本の歴史	7
9	人間の条件	7	7	うず潮	7	9	白い巨搭	6	4	ジェーン・エア	7	8	友 情	7
9	織田信長	7	10	暗夜行路	6	9	氷 壁	6	10	心	6	10	赤と黒	6
9	源氏物語	7	10	人間革命	6	9	赤と黒	6	10	華岡青州の妻	6	10	暗夜行路	6
9	おれについてこい	7				9	日本歴史シリーズ	6	10	人間革命	6	10	愛と死	6
												10	風と共に去りぬ	6
												10	大 地	6
												10	橋のない川	6

1970年代前半(1970年～1974年)

25回<1970(昭和45)年>			26回<1971(昭和46)年>			27回<1972(昭和47)年>			28回<1973(昭和48)年>			29回<1974(昭和49)年>		
順	書名	861	順	書名	862	順	書名	848	順	書名	840	順	書名	812
1	樅の木は残った	7	1	徳川家康	6	1	徳川家康	7	1	恍惚の人	17	1	恍惚の人	不明
2	天と地と	6	1	誰のために愛するか	6	2	氷 点	5	2	女の一生	7	2	徳川家康	9
2	徳川家康	6	3	樅の木は残った	5	3	狹き門	4	3	伊豆の踊子	6	3	勝海舟	8
2	橋のない川	6	3	源氏物語	5	3	破 戒	4	3	国盗物語	6	4	日本沈没	7
5	女の一生	5	5	春の坂道	4	3	戦争と平和	4	3	人間革命	6	5	人間革命	6
6	浮 雲	4	6	女の一生	3	6	風と共に去りぬ	3	6	こころ	5	5	伊豆の踊子	6
6	嵐ヶ丘	4	6	坊ちゃん	3	6	三四郎	3	6	日本沈没	5	7	青春の門	5
6	戦争と平和	4	6	こころ	3	6	樅の木は残った	3	8	破 戒	4	7	雪 国	5
6	坊ちゃん	4	6	赤頭巾ちゃん気	3	6	人間革命	3	8	ゼロの焦点	4	7	花のいのち	5
10	伊豆の踊子	3	6	金閣寺	3	6	新平家物語	3	10	愛と死	3	10	二十歳の原点	4
10	スバルタ教育	3	6	人間失格	3	6	罪と罰	3	10	赤と黒	3	10	坊ちゃん	4
10	破 戒	3	6	斜 曙	3	6	女の一生	3	10	冠婚葬祭入門	3	10	戦争と平和	4
10	雪 国	3										10	冠婚葬祭入門	4

1970年代後半(1975年～1979年)

30回<1975(昭和50)年>			31回<1976(昭和51)年>			32回<1977(昭和52)年>			33回<1978(昭和53)年>			34回<1979(昭和54)年>		
順	書名	840	順	書名	843	順	書名	861	順	書名	871	順	書名	866
1	青春の門	13	1	青春の門	15	1	犬神家の一族	12	1	人間の証明	13	1	人間の証明	8
2	恍惚の人	9	2	こころ	8	2	女の一生	10	2	青春の門	9	2	果てしなき流れ	6
2	複合汚染	9	3	友 情	6	3	花 神	7	2	徳川家康	9	9	のなかに	
4	坊ちゃん	8	3	坊ちゃん	6	3	宮本武蔵	7	4	犬神家の一族	7	2	白昼の死角	6
5	徳川家康	6	3	女の一生	6	3	青春の門	7	4	坊ちゃん	7	4	あゝ野麦峠	5
5	伊豆の踊子	6	3	徳川家康	6	6	獄門島	6	6	女の一生	6	4	恍惚の人	5
7	こころ	5	7	雪 国	4	6	悪魔の手毬歌	6	6	女王蜂	6	4	獄門島	5
7	女の一生	5	7	二十四の瞳	4	6	砂の器	6	8	悪魔の手毬歌	5	4	女の一生	5
7	二十歳の原点	5	7	風と共に去りぬ	4	6	ゼロの焦点	6	8	雪 国	5	4	徳川家康	5
10	日本沈没	4	7	人間革命	4	6	人間失格	6	8	砂の器	5	9	点と線	4
10	人間革命	4	7	日本沈没	4							9	野生の証明	4
10	車輪の下	4	7	新平家物語	4							9	青春の門	4
10	二十四の瞳	4	7	恍惚の人	4							9	砂の器	4
												9	病院坂の首縊りの家	4

## 1年間に読んだ書籍ベスト10の推移②

1980年代前半(1980年～1984年)

35回<1980(昭和55)年>		36回<1981(昭和56)年>		37回<1982(昭和57)年>		38回<1983(昭和58)年>		39回<1984(昭和59)年>								
順	書名	860	順	書名	898	順	書名	860	順	書名	892	順	書名	892		
1	復活の日	8	1	窓ぎわのトットちゃん	24	1	窓ぎわのトットちゃん	45	1	徳川家康	22	1	徳川家康	19		
2	青春の門	7	2	蒼い時	13	2	青春の門	10	2	窓ぎわのトットちゃん	21	2	気くばりのすすめ	16		
3	砂の器	6	3	こころ	7	3	人間万事塞翁が丙午	7	2	気くばりのすすめ	21	3	積木くずし	13		
4	徳川家康	5	4	青春の門	6	4	女の一生	6	4	積木くずし	16	4	窓ぎわのトットちゃん	12		
4	こころ	5	4	徳川家康	6	4	徳川家康	6	5	探偵物語	9	5	宮本武蔵	8		
4	四季・奈津子	5	6	ノストラダムスの大予言	5	6	魔羅の飽食	5	6	チョッちゃんが行くわよ	6	6	三国志	6		
4	女の一生	5	6	四季・奈津子	5	6	三国志	5	7	織田信長	4	6	晴れ、ときどき殺人	6		
8	あゝ野麦峠	4	8	飛鳥へ そして	4	8	蒼い時	4	7	十年後	4	8	愛、見つけた	4		
9	戒厳令の夜	3	まだ見ぬ子へ	8	セーラー服と機関銃	4	7	時をかける少女	4	8	生きていく私	4	8	新・里見八犬伝	4	
9	人間の証明	3	織田信長	4	プロ野球を100倍	4	8	魔羅の飽食	3	8	三国志	3	8	続・気くばりのすすめ	4	
9	暗夜行路	3	砂の器	4	楽しく見る方法	4	8	女の一生	3	8	塩狩峠	3	8	探偵物語	4	
9	源氏物語	3	ねらわれた学園	4	8	竜馬がゆく	4	8	幻魔大戦	3	8	自分学のすすめ	3	8	みゆき	4
9	兎の眼	3				8	我輩は猫である	4	8	恍惚の人	3	8	友 情	4		
9	人生・負ける度胸	3														

1980年代後半(1985年～1989年)

40回<1985(昭和60)年>		41回<1986(昭和61)年>		42回<1987(昭和62)年>		43回<1988(昭和63)年>		44回<1989(平成元)年>						
順	書名	983	順	書名	882	順	書名	873	順	書名	889	順	書名	898
1	「三毛猫ホームズ」シリーズ	11	1	気くばりのすすめ	7	1	伊達正宗	1	武田信玄	25	1	ノルウェイの森		
2	真田太平記	10	1	徳川家康	7	2	B E - B O P - H I G H S C H O O L	2	徳川家康	13	2	武田信玄		
3	徳川家康	8	1	B E - B O P - H I G H S C H O O L	7	2	ノルウェイの森	3	T U G U M I	13	3	春日局		
4	気くばりのすすめ	7	4	化 粧	6	3	人間失格	4	「三毛猫ホームズ」シリーズ	10	4	キッキン		
5	タッチ	6	5	たけしきんハイ!!	4	3	独眼流正宗	4	BE - BOP - HIGHSCHOOL	10	6	こころ		
5	ビルマの豊琴	6	5	ひとひらの雪	4	3	めぞん一刻	6	三国志	7	6	三国志		
5	宮本武蔵	6	7	愛のごとく	3	7	徳川家康	7	豊臣秀吉	6	6	BE - BOP - HIGHSCHOOL		
8	源氏物語	5	7	姥ざかり	3	7	宮本武蔵	7	9	ダンス・ダンス・ダンス	3	9	徳川家康	
9	ゴルゴ13	4	7	化 身	3	7	三国志	8	9	水 点	3	9	「三毛猫ホームズ」シリーズ	
9	三国志	4	7	坂の上の雲	3	7	「三毛猫ホームズ」シリーズ	8	9	「三毛猫ホームズ」シリーズ	9			
9	竜馬がゆく	4	7	序の舞	3	7	サラダ記念日	8	9	サラダ記念日	3			
9	BE - BOP - HIGHSCHOOL	4	7	女 優	3	7	窓ぎわのトットちゃん	8	9	ドラゴンボール	3			
9	みゆき	4	7	早春物語	3	7	7	7	9	7	7			
		7	7	伊達正宗	3	7	7	7	9	7	7			
		7	7	人間革命	3	7	7	7	9	7	7			
		7	7	BE FREE !	3	7	7	7	9	7	7			
		7	7	リラ冷えの街	3	7	7	7	9	7	7			

1990年代前半(1990年～1994年)

45回<1990(平成2)年>		46回<1991(平成3)年>		47回<1992(平成4)年>		48回<1993(平成5)年>		49回<1994(平成6)年>						
順	書名	862	順	書名	870	順	書名	848	順	書名	728	順	書名	713
1	翔ぶが如く	14	1	もものかんづめ	1	1	三国志	11	1	「三毛猫ホームズ」シリーズ	10	1	マディソン郡の橋	10
2	キッキン	11	2	三国志	2	2	ドラゴンボール	6	2	日本をダメにした九人の政治家	2	2	武田信玄	8
2	「NO」と言える日本	11	2	「三毛猫ホームズ」シリーズ	3	3	織田信長	5	3	「三毛猫ホームズ」シリーズ	6	3	「三毛猫ホームズ」シリーズ	6
2	ノルウェイの森	11	4	SLAM DUNK	5	4	SLAM DUNK	5	4	さるのこしかけ	6	4	太閤記	5
5	T U G U M I	10	4	太閤記	5	5	徳川家康	4	5	磯野家の謎	5	5	豊臣秀吉	5
6	「三毛猫ホームズ」シリーズ	9	4	ドラゴンボール	6	5	血 族	4	4	ドラゴンボール	5	4	三国志	5
7	徳川家康	7	6	徳川家康	5	5	真夜中は別の顔	4	5	上杉鷹山	5	4	ワイルド・スワン	5
8	次郎物語	5	6	美智子皇后ともしびの旅	8	6	もものかんづめ	3	6	ワイルド・スワン	5	5	「ノルウェイの森	5
8	ちびまる子ちゃん	5	6	美味しんぼ	8	7	ノストラダムスの大予言	3	7	明け方の夢	5	5	美しいんば	5
8	天と地と	5	6	春日局	6	7	「NO」と言える日本	3	8	10 H 2	5	5	生きるヒント	4
		6	6	愛される理由	6	8	ノストラダムスの大予言	3	9	10 三国志	4	8	時間の砂	4
		6	6			9	8	8	10 炎立つ	4	8	8	うたかた	4
		6	6			9	8	8	10 炎立つ	4	8	8	アルジャーノンに花束を	4
		6	6			10	8	8	10 三国志	4	8	8	三国志	4
		6	6			10	8	8	10 人間革命	4	8	8	日本改造計画	4
		6	6			10	8	8	10 人間革命	4	8	8	日本一短い「母」への手紙	4
		6	6			10	8	8	10 人間革命	4	8	8	日本改造計画	4
		6	6			10	8	8	10 人間革命	4	8	8	橋のない川	4

1990年代後半(1995年～1999年)

50回<1995(平成7)年>		51回<1996(平成8)年>		52回<1997(平成9)年>		53回<1998(平成10)年>		54回<1999(平成11)年>						
順	書名	754	順	書名	791	順	書名	788	順	書名	820	順	書名	1146
1	S L A M D U N K	7	1	藏	15	1	脳内革命	25	1	「三毛猫ホームズ」シリーズ	1	五体不満足	67	
2	こころの日曜日	6	2	脳内革命	10	2	失楽園	18	2	十津川警部シリーズ	2	鉄道員	9	
2	八代将軍吉宗	6	3	マディソン郡の橋	8	3	毛利元就	7	2	頭文字D	2	頭文字D	9	
2	マディソン郡の橋	6	4	大地の子	7	4	平気でうそをつく人たち	5	3	花より男子	4	花より男子	7	
5	一詩行 父よ母よ	5	5	こころ	6	6	「三毛猫ホームズ」シリーズ	5	4	少年H	5	少年H	5	
7	アルジャーノンに花束を	4	5	秀 吉	6	6	生きるヒント	4	5	金田一少年の事件簿	4	金田一少年の事件簿	5	
8	F B I 心理分析官	3	5	フォレスト・ガンプ	6	6	E Q こころの知能指数	4	6	名探偵コナン	5	名探偵コナン	5	
8	行け！ 稲中卓球部	3	5	金田一少年の事件簿	5	6	シユート！	4	6	失楽園	6	失楽園	4	
8	クレヨンしんちゃん	3	9	ソフィーの世界	5	6	徳川家康	4	6	少年H	6	少年H	4	
8	心に残るとっておきの話	3	9	S L A M D U N K	5	6	徳川慶喜家の子ども部屋	4	10	G T O	6	mon st er	4	
8	スローウォルツの川	3				6	徳川慶喜家の子ども部屋	4	10	らせん	6	ジヤンプ	4	
8	徳川吉宗	3				6	徳川慶喜家の子ども部屋	4	10	リング	6	リング	4	
8	大往生	3				6	徳川慶喜家の子ども部屋	4	10	三国志	6	三国志	4	
8	日本一短い「母」への手紙	3				6	徳川慶喜家の子ども部屋	4	10	日本語練習帳	6	日本語練習帳	4	
8	花より男子	3				6	徳川慶喜家の子ども部屋	4	10	脳内革命	6	脳内革命	4	
8	日本をダメにした九人の政治家	3				6	徳川慶喜家の子ども部屋	4	10	脳内革命	6	脳内革命	4	
8	堀田力の「おごるな上司！」	3				6	徳川慶喜家の子ども部屋	4	10	脳内革命	6	脳内革命	4	
8	ワイルド・スワン	3				6	徳川慶喜家の子ども部屋	4	10	脳内革命	6	脳内革命	4	
8	フォレスト・ガンプ	3				6	徳川慶喜家の子ども部屋	4	10	脳内革命	6	脳内革命	4	

### 1年間に読んだ書籍ベスト10の推移③

2000年代前半(2000年～2004年)

55回<2000(平成12)年>			56回<2001(平成13)年>			57回<2002(平成14)年>			58回<2003(平成15)年>			59回<2004(平成16)年>		
順	書名	843	順	書名	831	順	書名	887	順	書名	860	順	書名	777
1	五体不満足	32	1	チーズはどこへ消えた？	16	1	「ハリー・ポッター」シリーズ	15	1	「ハリー・ポッター」シリーズ	37	1	世界の中心で、愛をさけぶ	27
2	だから、あなたも生きぬいて	17	1	「ハリー・ポッター」シリーズ	16	2	五体不満足	8	2	バカの壁	7	2	バカの壁	11
3	永遠の仔	5	3	五体不満足	11	3	生きかた上手	7	3	声に出して読みたい日本語	4	2	冬のソナタ	11
3	乙武レポート	5	4	だから、あなたも生きぬいて	7	4	ONE PIECE	5	4	OUT	3	4	蹴りたい背中	8
3	子どもが育つ魔法の言葉	5	5	金持ち父さん貧乏父さん	6	4	三国志	5	4	ロード・オブ・ザ・リング	3	5	ONE PIECE	7
3	「三毛猫ホームズ」シリーズ	5	5	ONE PIECE	6	4	大河の一滴	5	4	陰陽師	3	6	「ハリー・ポッター」シリーズ	6
7	黒い家	4	6	頭文字D	4	6	白い犬とワルツを	4	4	花より男子	3	6	天国の本屋～恋火	6
7	少年H	4	7	子どもが育つ魔法の言葉	4	8	沈まぬ太陽	3	4	生きかた上手	3	8	解夏	5
7	大地の子	4	7	天国への階段	4	8	沈まぬ太陽	3	4	沈まぬ太陽	3	8	蛇にピアス	5
7	天の瞳	4	7	ホワイトアウト	4	8	命	3	4	動機	3	8	半落ち	5
7	人間革命	4							4	半落ち	3			
7	葉っぱのフレディ	4							4	不安の力	3			

2000年代後半(2005年～2009年)

60回<2005(平成17)年>			61回<2006(平成18)年>			62回<2007(平成19)年>			63回<2008(平成20)年>			64回<2009(平成21)年>		
順	書名	773	順	書名	870	順	書名	892	順	書名	865	順	書名	884
1	いま、会いにゆきます	9	1	「ハリー・ポッター」シリーズ	19	1	「ハリー・ポッター」シリーズ	17	1	「ハリー・ポッター」シリーズ	19	1	ONE PIECE	11
1	「ハリー・ポッター」シリーズ	9	2	ダ・ヴィンチ・コード	18	2	佐賀のがばいばあちゃん	15	2	ホームレス中学生	17	2	BLEACH	5
3	ダ・ヴィンチ・コード	8	3	NANA	11	3	ONE PIECE	7	3	天璋院雛姫	13	2	NARUTO	5
4	世界の中心で、愛をさけぶ	7	3	東京タワー	11	3	東京タワー	7	4	ONE PIECE	6	2	はじめの一歩	5
5	NANA	6	5	国家の品格	6	3	恋空～切ナイ恋物語～	7	5	夢をかなえるゾウ	5	2	天地人	5
6	BLEACH	4	6	DEATH NOTE	5	6	国家の品格	6	5	東京タワー	5	6	1 Q 8 4	4
6	頭がいい人、悪い人の話しあ	4	6	バッテリー	5	7	BLEACH	5	5	佐賀のがばいばあちゃん	5	6	花より男子	4
6	名探偵コナン	4	6	ブレイブ・ストーリー	5	8	メジャー	4	8	恋空～切ナイ恋物語～	4	6	余命一ヶ月の花嫁	4
9	リットルの涙	3	9	「三毛猫ホームズ」シリーズ	4	8	リットルの涙	4	8	女性の品格	4	4	流星の絆	4
9	バカの壁	3	8	ナルニア国物語	4	8	明日の記憶	4	8	ドラゴンボール	4	10	O型自分の説明書	3
9	陰陽師	3	9	ハッピー・バースデー	4	8	バッテリー	4	8	チーム・バチスタの栄光	4	10	あひるの空	3
9	四日間の奇蹟	3	9	僕等がいた	4	8	女性の品格	4	8	病気にならない生き方	4	10	ダイヤのA	3
9	蒼穹の昴	3	9	夜回り先生	4						10	バカボンド	3	
9	東京タワー	3									10	蟹工船	3	
											10	佐賀のがばいばあちゃん	3	
											10	女性の品格	3	
											10	博士の愛した数式	3	
											10	容疑者Xの獻身	3	

2010年代前半(2010年～2012年)

65回<2010(平成22)年>			66回<2011(平成23)年>			67回<2012(平成24)年>		
順	書名	905	順	書名	879	順	書名	882
1	ONE PIECE	19	1	ONE PIECE	13	1	ONE PIECE	16
2	1 Q 8 4	10	2	告白	11	2	謎解きはディナーのあとで	8
3	告白	8	3	もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら	10	3	大往生したけりや医療とかかわるな	5
4	ゲゲゲの女房	7	4	NARUTO	7	3	平清盛	5
5	BLEACH	6	5	老いの才覚	5	5	1 Q 8 4	4
5	坂の上の雲	6	6	BLEACH	4	5	「三毛猫ホームズ」シリーズ	4
7	「ハリー・ポッター」シリーズ	4	6	くじけないで	4	5	神様のカルテ	4
7	新参者	4	6	鬼平犯科帳	4	5	図書館戦争	4
7	龍馬伝	4	6	謎解きはディナーのあとで	4	9	ノルウェイの森	3
10	NARUTO	3	6	八日目の蝉	4	9	ビブリア古書堂の事件手帖—葉子さんと奇妙な客人たち	3
10	グラスホッパー	3	6			9	夏目友人帳	3
10	ゴールデンスランバー	3	6			9	「居眠り磐音江戸双紙」シリーズ	3
10	サヨナライツカ	3	6			9	金田一少年の事件簿	3
10	バカボンド	3	6			9	黒子のバスケ	3
10	銀魂	3	6			9	手紙	3
10	鋼の錬金術師	3	6			9	頭文字D	3
10	三国志	3	6			9	秘密	3
10	週末のフール	3						
10	獣の奏者シリーズ	3						
10	食堂かたつむり	3						
10	親鸞	3						
10	童馬がゆく	3						

## ◆好きな作家ベストテンをひも解く

好きな作家・著者のベストテンがどう変わったのかをみていきたい（P 50～52参照）。

60年代のリストを見ていて驚くのは石坂洋次郎の人気ぶりである。10年間を通じて1位が7回、2位が2回、4位が1回。ダントツの強さだ。『若い人』、『青い山脈』などで知られるが、1900年生まれだから60年代は還暦を過ぎている。それでもこの人気だ。さすがに70年代になると落ちてきて、1位になることはない。それでも2位が3回、4位・6位・7位・8位・10位が1回ずつ。ベストテンに入らなかったのは2回だけ。

もっとも、忘れられるのも早かったように思う。80年代以降はランキングに登場しないが、書店等でも作品を見かけない。どんな顔だったのか、知らない人も多いだろう。亡くなつたのは86年である。

60年代、石坂洋次郎に次いで人気があったのは吉川英治だ。1位こそ60年の1回だけだが、10年間、2位や3位、4位の上位につけている。石坂洋次郎と対照的なのは、人気が長く続いていることである。70年代もほぼ毎年のようにランクインしているし、80年代、90年代でも名前が出てくる。最後は2000年の9位。1892年に生まれ、1962年に亡くなっている。つまり、死後も長く読まれ続けた作家なのだ。『宮本武蔵』や『新・平家物語』など、おもに歴史小説を書いていることも、長く読まれている理由だろう。彼の名前を冠した文学賞は権威あるものだし、文庫にも彼の名前がつけられている。

松本清張も長い人気の作家。60年から2012年までの間で、ベストテンに登場しないのは60年と2011年のたった2回だけなのだ。日本の農村でもっとも愛されている作家は松本清張なのかもしれない。

夏目漱石も60年代の常連作家。いや、60年代どころか、90年代の初めまで、毎年のようにランクインしている。明治の文豪でこんなに長く読まれているのは漱石だけだ。

74年から登場するのは五木寛之である。現在に至るまで、ほぼ毎年のように登場する。ただし、作品の傾向および読まれかたは異なる。70年代は『青春の門』に代表される良質な大衆小説の書き手としてであり、90年代からは『生きるヒント』や『大河の一滴』など人生観について述べたエッセイの書き手としてである。

五木もその一人かもしれないが、スター的な書き手が登場するのも70年代からだ。たとえば石原慎太郎。デビュー作『太陽の季節』が大ヒットした1956年はデータ外だが、71年からたびたび顔を出す。70年に教育エッセイ『スバルタ教育』がヒットしたことなどがあるのかもしれない。68年に参議院に出馬して当選、72年に衆議院にくら替えて当選している。作品を通じてというよりも、選挙報道を通じて、知名度が上がっていたのだろう。遠藤周作の名前も74年からあるが、コーヒーのテレビCMに登場したことや、ユーモア・エッセイ『狐狸庵先生』もののヒットによるところが大きい。

81年に司馬遼太郎が登場する。ポスト吉川英治的国民作家は司馬だろう。以降、ほとんど毎年のようにベストテンに入っている。しかし1位になるのは2000年の1回だけ。いつもリストのまんなかあたりにいる。

赤川次郎は83年に登場したときは9位だったが、その後84年に2位になり、85年か

ら2003年までずっと1位の座をキープしている。2000年だけ司馬遼太郎に譲ったのが唯一の例外。その後もランキングの上位に留まり、2010年代になっても連続2位を続けている。赤川の「三毛猫ホームズ」はユーモラスなミステリーのシリーズで、中学生から高齢者まで幅広いファンに読まれている。60年代の教養主義的な本の読まれかたとは違う、娯楽としての読書が一般化してきたためと考えられる。90年代に赤川とトップを争うようにランクインしているのは、鉄道ミステリーの西村京太郎であり、大人の恋愛小説を書き続ける渡辺淳一である。

90年代、村上春樹や吉本ばなな（現・よしもとばなな）、さくらももこといった新しい作家の名前にまじって、シドニイ・シェルダンが登場する。日本には以前から紹介されていたが、翻訳をより読みやすい日本語にした「超訳」のシリーズによって読者層を広げた。

2000年代の常連は宮部みゆきである。ある作家が「作家には2種類ある。宮部みゆきと、宮部みゆき以外だ」といったが、出せば必ずヒットする作家である。しかも現代を舞台にしたミステリーから、時代小説、近未来SFまでと幅広い。瀬戸内寂聴も毎年のように登場するが、小説家としてよりも人生を語る尼僧作家としての人気かもしれない。

2000年以降は赤川や西村、五木、宮部のような常連作家以外は入れ替わりが激しい。相田みつを（2000年）のように一度だけ登場する人もいれば、宮尾登美子や平岩弓枝、林真理子のように、話題作があったときにのみ登場する人もいる。読者の好みが多様化しているのを感じる。

注目したいのは2010年のベストテンに尾田栄一郎の名前があることである。コミック『ONE PIECE』の漫画家である。手塚治虫も赤塚不二夫も水木しげるも「好きな作家ベスト10」に入ったことがない。漫画家が「作家」として認知されなかったのだ（さくらももこは漫画家だが、彼女がランクインしたのはエッセイストとしてだろう）。それが21世紀になって変わった。

2000年以降と60年代とで、どこが違うか。それは「同時代感」ともいうべき雰囲気だと思う。60年代のリストをみていると、古典名作や大家の名前が多く、同時代という感覚が希薄だ。当時の売れている本、よく読まれた本ともズレがある。それが時代が下るに従って、同時代の現役作家から「好きな作家」が選ばれるようになっている。教養主義からの脱却ともいえるし、出版ビジネスの情報化が行き渡ったためだと考えられる。

永江朗 フリーライター

## 好きな作家・著者ベスト10の推移①

1960年代前半(1960年～1964年)

15回<1960(昭和35)年>			16回<1961(昭和36)年>			17回<1962(昭和37)年>			18回<1963(昭和38)年>			19回<1964(昭和39)年>		
順	氏名	2587	順	氏名	2575	順	氏名	1279	順	氏名	2618	順	氏名	1335
1	吉川 英治	100	1	石坂 洋次郎	121	1	石坂 洋次郎	45	1	松本 清張	99	1	石坂 洋次郎	92
2	石坂 洋次郎	88	2	吉川 英治	108	2	源氏 鶴太	37	2	吉川 英治	91	2	松本 清張	63
3	井上 靖	87	3	井上 靖	98	3	松本 清張	32	3	源氏 鶴太	84	3	吉川 英治	44
4	夏目 漱石	78	4	源氏 鶴太	93	4	吉川 英治	31	4	石坂 洋次郎	81	4	武者小路 実篤	43
5	源氏 鶴太	65	5	松本 清張	67	5	井上 靖	27	5	夏目 漱石	49	5	源氏 鶴太	42
6	山手 樹一郎	56	6	夏目 漱石	48	6	夏目 漱石	19	6	武者小路 実篤	48	6	井上 靖	30
7	武者小路 実篤	38	7	川口 松太郎	42	7	武者小路 実篤	18	7	山手 樹一郎	44	7	夏目 漱石	27
8	川口 松太郎	37	8	武者小路 実篤	40	8	山手 樹一郎	16	8	井上 靖	40	8	林 芙美子	22
9	山本 有三	33	9	山手 樹一郎	39	8	壺井 栄	16	9	川端 康成	39	9	水上 勉	21
10	川端 康成	31	10	丹羽 文雄	35	10	吉屋 信子	15	10	菊池 寛	29	10	川口 松太郎	18

1960年代後半(1965年～1969年)

20回<1965(昭和40)年>			21回<1966(昭和41)年>			22回<1967(昭和42)年>			23回<1968(昭和43)年>			24回<1969(昭和44)年>		
順	氏名	1384	順	氏名	1383	順	氏名	1320	順	氏名	1301	順	氏名	1286
1	石坂 洋次郎	77	1	石坂 洋次郎	80	1	石坂 洋次郎	97	1	石坂 洋次郎	86	1	川端 康成	70
2	吉川 英治	51	2	源氏 鶴太	43	2	吉川 英治	58	2	石原 慎太郎	51	2	石坂 洋次郎	59
3	林 芙美子	44	3	夏目 漱石	41	3	源氏 鶴太	46	3	夏目 漱石	49	3	夏目 漱石	56
4	川端 康成	43	4	吉川 英治	38	4	夏目 漱石	44	4	源氏 鶴太	44	4	松本 清張	33
5	源氏 鶴太	42	5	松本 清張	35	5	松本 清張	43	5	松本 清張	39	5	源氏 鶴太	31
6	松本 清張	35	6	井上 靖	23	6	井上 靖	24	6	川端 康成	32	6	武者小路 実篤	26
7	夏目 漱石	33	7	林 芙美子	22	7	川端 康成	24	7	武者小路 実篤	27	6	井上 靖	26
8	井上 靖	30	8	川端 康成	21	8	島崎 藤村	17	8	吉川 英治	24	6	吉川 英治	26
9	武者小路 実篤	25	9	武者小路 実篤	19	9	菊池 寛	16	9	井上 靖	16	9	石原 慎太郎	25
10	島崎 藤村	23	9	島崎 藤村	19	10	武者小路 実篤	15	9	島崎 藤村	16	9	林 芙美子	25
						10	林 芙美子	15				9	三島 由紀夫	25
						10	吉屋 信子	15				9		

1970年代前半(1970年～1974年)

25回<1970(昭和45)年>			26回<1971(昭和46)年>			27回<1972(昭和47)年>			28回<1973(昭和48)年>			29回<1974(昭和49)年>		
順	氏名	861	順	氏名	862	順	氏名	848	順	氏名	840	順	氏名	812
1	川端 康成	19	1	松本 清張	27	1	松本 清張	16	1	松本 清張	17	1	松本 清張	28
2	石坂 洋次郎	18	2	川端 康成	18	2	石坂 洋次郎	15	2	石坂 洋次郎	15	2	夏目 漱石	21
2	夏目 漱石	18	3	源氏 鶴太	16	3	吉川 英治	14	2	吉川 英治	15	3	有吉 佐和子	14
4	吉川 英治	15	4	夏目 漱石	14	4	川端 康成	13	4	川端 康成	14	3	五木 寛之	14
5	水上 勉	14	5	三島 由紀夫	13	5	吉屋 信子	11	5	石原 慎太郎	12	5	川端 康成	12
6	松本 清張	13	6	石坂 洋次郎	10	6	夏目 漱石	9	6	三島 由紀夫	11	6	遠藤 周作	11
6	源氏 鶴太	13	6	石原 慎太郎	10	6	武者小路 実篤	9	7	源氏 鶴太	10	7	石坂 洋次郎	10
6	吉屋 信子	13	8	太宰 治	9	6	石原 慎太郎	9	8	吉屋 信子	8	8	源氏 鶴太	8
9	井上 靖	11	9	島崎 藤村	8	6	源氏 鶴太	9	8	島崎 藤村	8	8	吉屋 信子	8
10	島崎 藤村	10	9	芥川 龍之介	8	10	林 芙美子	8	10	武者小路 実篤	7	8	曾野 綾子	8
			9	山本 有三	8	10	三島 由紀夫	8	10	山手 樹一郎	7			
			9	吉川 英治	8	10	有吉 佐和子	8	10	森村 桂	7			

1970年代後半(1975年～1979年)

30回<1975(昭和50)年>			31回<1976(昭和51)年>			32回<1977(昭和52)年>			33回<1978(昭和53)年>			34回<1979(昭和54)年>		
順	氏名	840	順	氏名	843	順	氏名	861	順	氏名	871	順	氏名	866
1	有吉 佐和子	24	1	松本 清張	35	1	松本 清張	29	1	松本 清張	38	1	松本 清張	36
2	松本 清張	19	2	川端 康成	16	2	吉川 英治	16	2	横溝 正史	30	2	五木 寛之	21
3	五木 寛之	15	2	夏目 漱石	16	3	横溝 正史	14	3	有吉 佐和子	20	3	夏目 漱石	15
4	遠藤 周作	14	4	源氏 鶴太	15	3	川端 康成	14	4	夏目 漱石	17	4	森村 誠一	14
5	川端 康成	13	4	石坂 洋次郎	15	5	夏目 漱石	13	5	吉川 英治	16	5	源氏 鶴太	13
5	吉屋 信子	13	6	五木 寛之	14	5	五木 寛之	13	6	森村 誠一	15	6	横溝 正史	12
7	夏目 漱石	12	7	吉川 英治	12	7	太宰 治	11	6	五木 寛之	15	6	遠藤 周作	12
8	水上 勉	11	8	遠藤 周作	10	8	水上 勉	9	8	石坂 洋次郎	13	6	水上 勉	12
9	石川 達三	10	9	武者小路 実篤	9	9	芥川 龍之介	8	9	太宰 治	12	9	有吉 佐和子	11
10	源氏 鶴太	9	10	太宰 治	8	10	石坂 洋次郎	7	9	水上 勉	12	9	吉川 英治	11
			10	林 芙美子	8	10	井上 靖	7				10	林 芙美子	
					10		林 芙美子	7				10		

## 好きな作家・著者ベスト10の推移②

1980年代前半(1980年～1984年)

35回<1980(昭和55)年>			36回<1981(昭和56)年>			37回<1982(昭和57)年>			38回<1983(昭和58)年>			39回<1984(昭和59)年>		
順	氏名	860	順	氏名	898	順	氏名	860	順	氏名	892	順	氏名	892
1	松本 清張	36	1	松本 清張	31	1	松本 清張	23	1	松本 清張	24	1	松本 清張	29
2	五木 寛之	22	2	五木 寛之	18	2	横溝 正史	12	2	渡辺 淳一	13	2	赤川 次郎	25
3	吉川 英治	17	3	森村 誠一	17	3	夏目 漱石	11	3	五木 寛之	11	3	五木 寛之	17
4	夏目 漱石	13	4	夏目 漱石	15	4	森村 誠一	10	3	横溝 正史	11	4	森村 誠一	14
5	有吉 佐和子	12	5	曾野 紗子	11	5	渡辺 淳一	9	5	曾野 紗子	9	5	司馬 遼太郎	12
6	井上 靖	11	6	吉川 英治	10	6	曾野 紗子	8	5	森村 誠一	9	6	平岩 弓枝	11
7	石川 達三	9	6	山本 周五郎	10	6	五木 寛之	8	7	司馬 遼太郎	8	6	三浦 紗子	11
8	森村 誠一	8	6	川端 康成	10	6	司馬 遼太郎	8	7	三浦 紗子	8	6	吉川 英治	11
9	川端 康成	7	9	司馬 遼太郎	9	9	有吉 佐和子	7	9	赤川 次郎	7	9	田辺 聖子	10
9	曾野 紗子	7	9	芥川 龍之介	9	9	星 新一	7	9	田辺 聖子	7	9	夏目 漱石	10
9	三浦 紗子	7	9	遠藤 周作	9	9	源氏 鶴太	7	9	平岩 弓枝	7	9	水上 勉	7

1980年代後半(1985年～1989年)

40回<1985(昭和60)年>			41回<1986(昭和61)年>			42回<1987(昭和62)年>			43回<1988(昭和63)年>			44回<1989(平成元)年>		
順	氏名	983	順	氏名	882	順	氏名	873	順	氏名	889	順	氏名	898
1	赤川 次郎	47	1	赤川 次郎	27	1	赤川 次郎		1	赤川 次郎	49	1	赤川 次郎	
2	松本 清張	26	2	松本 清張	25	2	松本 清張		2	渡辺 淳一	20	2	松本 清張	
3	森村 誠一	21	3	渡辺 淳一	21	3	田辺 聖子		3	松本 清張	15	3	渡辺 淳一	
4	五木 寛之	13	4	司馬 遼太郎	11	3	吉川 英治		4	新田 次郎	13	4	夏目 漱石	
4	渡辺 淳一	13	4	西村 京太郎	11	3	渡辺 淳一		4	三浦 紗子	13	4	西村 京太郎	
6	司馬 遼太郎	12	4	森村 誠一	11	6	夏目 漱石		6	五木 寛之	11	4	平岩 弓枝	
7	瀬戸内 寂聴	10	7	田辺 聖子	10	6	山岡 莊八		7	井上 靖	10	7	司馬 遼太郎	
7	田辺 聖子	10	7	橋田 壽賀子	10	8	新井 素子		7	司馬 遼太郎	10	7	田辺 聖子	
7	夏目 漱石	10	9	遠藤 周作	9	8	有吉 佐和子		7	平岩 弓枝	10	9	森村 誠一	
7	平岩 弓枝	10	10	五木 寛之	8	8	平岩 弓枝		10	西村 京太郎	9	9	吉本ばなな	
7	三浦 紗子	10	10	吉川 英治	8									

1990年代前半(1990年～1994年)

45回<1990(平成2)年>			46回<1991(平成3)年>			47回<1992(平成4)年>			48回<1993(平成5)年>			49回<1994(平成6)年>		
順	氏名	862	順	氏名	870	順	氏名	848	順	氏名	728	順	氏名	713
1	赤川 次郎	41	1	赤川 次郎		1	赤川 次郎	30	1	赤川 次郎	30	1	赤川 次郎	45
2	西村 京太郎	28	2	松本 清張		2	松本 清張	25	2	西村 京太郎	19	2	西村 京太郎	22
3	司馬 遼太郎	20	3	渡辺 淳一		3	西村 京太郎	14	3	渡辺 淳一	16	3	渡辺 淳一	15
4	吉本ばなな	17	4	司馬 遼太郎		4	渡辺 淳一	13	4	松本 清張	12	4	三浦 紗子	14
5	渡辺 淳一	15	5	夏目 漱石		5	司馬 遼太郎	11	5	さくらももこ	9	5	五木 寛之	12
6	夏目 漱石	14	6	西村 京太郎		6	内田 康夫	8	6	遠藤 周作	8	6	司馬 遼太郎	11
7	松本 清張	13	7	五木 寛之		6	橋田 壽賀子	8	6	曾野 紗子	8	6	松本 清張	11
8	田辺 聖子	12	7	田辺 聖子		6	瀬戸内 寂聴	8	8	シドニイ・シェルダン	7	8	井上 靖	10
9	五木 寛之	7	9	村上 春樹		9	吉川 英治	7	8	田辺 聖子	7	9	森村 誠一	9
9	星 新一	7	9	向田 邦子		9	椎名 誠	7	8	森村 誠一	7			
9	横溝 正史	7												
9	吉川 英治	7												

1990年代後半(1995年～1999年)

50回<1995(平成7)年>			51回<1996(平成8)年>			52回<1997(平成9)年>			53回<1998(平成10)年>			54回<1999(平成11)年>		
順	氏名	754	順	氏名	791	順	氏名	788	順	氏名	820	順	氏名	1146
1	赤川 次郎	27	1	赤川 次郎	24	1	赤川 次郎	33	1	赤川 次郎	30	1	赤川 次郎	28
2	西村 京太郎	15	2	司馬 遼太郎	15	2	渡辺 淳一	21	2	司馬 遼太郎	19	2	西村 京太郎	23
3	渡辺 淳一	14	3	西村 京太郎	12	3	西村 京太郎	20	3	西村 京太郎	16	3	司馬 遼太郎	16
4	松本 清張	13	3	松本 清張	12	4	松本 清張	12	4	松本 清張	12	4	松本 清張	12
5	橋田 壽賀子	12	5	宮尾 登美子	10	5	内田 康夫	10	5	内田 康夫	5	5	池波 正太郎	9
6	池波 正太郎	8	5	渡辺 淳一	10	6	五木 寛之	8	6	五木 寛之	5	5	渡辺 淳一	9
6	田辺 聖子	8	7	夏目 漱石	9	6	平岩 弓枝	8	6	瀬戸内 寂聴	7	7	さくらももこ	8
6	吉本ばなな	8	8	吉川 英治	8	6	吉川 英治	8	8	吉川 英治	7	7	吉本ばなな	8
9	五木 寛之	7	10	五木 寛之	7	9	司馬 遼太郎	7	8	山本 周五郎	7	7	山村 美紗	8
9	内田 康夫	7	10	内田 康夫	7	9	瀬戸内 寂聴	7	10	さくらももこ	7	7	内田 康夫	8
			10	シドニイ・シェルダン	7			10	シドニイ・シェルダン	10		10	宮尾 登美子	
								10	シドニイ・シェルダン	10		10	浅田 次郎	

### 好きな作家・著者ベスト10の推移③

2000年代前半(2000年～2004年)

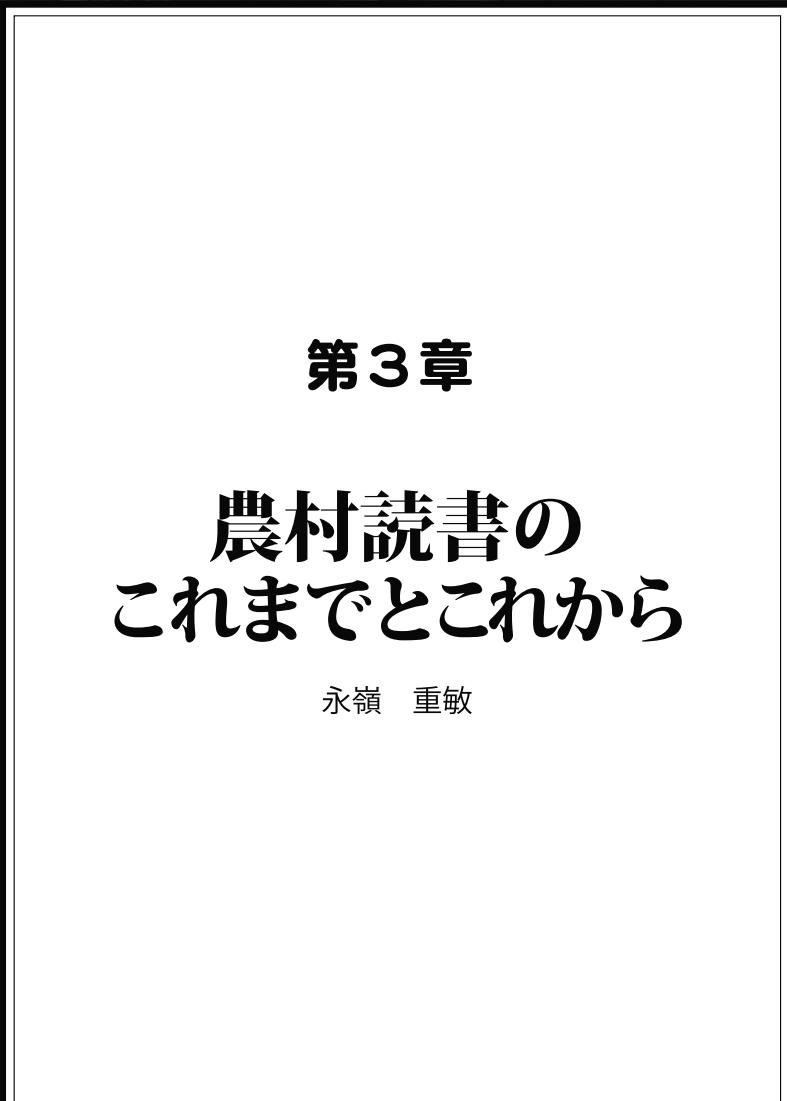
55回<2000(平成12)年>			56回<2001(平成13)年>			57回<2002(平成14)年>			58回<2003(平成15)年>			59回<2004(平成16)年>		
順	氏名	843	順	氏名	831	順	氏名	887	順	氏名	860	順	氏名	777
1	司馬 遼太郎	18	1	赤川 次郎	24	1	赤川 次郎	14	1	赤川 次郎	21	1	西村 京太郎	19
2	赤川 次郎	17	2	西村 京太郎	21	2	五木 寛之	13	2	西村 京太郎	17	2	赤川 次郎	18
3	宮尾 登美子	12	3	内田 康夫	13	3	司馬 遼太郎	12	3	宮部 みゆき	16	3	宮部 みゆき	11
4	西村 京太郎	11	4	司馬 遼太郎	10	3	西村 京太郎	12	4	五木 寛之	11	4	瀬戸内 寂聴	9
5	内田 康夫	10	5	渡辺 淳一	8	5	宮部 みゆき	11	5	内田 康夫	10	5	渡辺 淳一	8
6	五木 寛之	9	6	松本 清張	7	6	渡辺 淳一	8	6	松本 清張	9	6	五木 寛之	7
6	宮部 みゆき	9	7	五木 寛之	6	7	宮尾 登美子	7	6	林 真理子	9	6	司馬 遼太郎	7
8	瀬戸内 寂聴	8	7	瀬戸内 寂聴	6	7	瀬戸内 寂聴	7	8	瀬戸内 寂聴	8	6	藤沢 周平	7
9	吉川 英治	6	7	藤沢 周平	6	9	宮本 輝	6	9	池波 正太郎	7	9	よしもとばなな	5
10	相田 みつを	5	7	山村 美紗	6	9	松本 清張	6	9	渡辺 淳一	7	9	松本 清張	5
10	池波 正太郎	5				9	池波 正太郎	6				9	内田 康夫	5
10	田辺 聖子	5				9	内田 康夫	6						
10	平岩 弓枝	5				9	平岩 弓枝	6						
10	三浦 綾子	5												
10	吉本ばなな	5												
10	渡辺 淳一	5												

2000年代後半(2005年～2009年)

60回<2005(平成17)年>			61回<2006(平成18)年>			62回<2007(平成19)年>			63回<2008(平成20)年>			64回<2009(平成21)年>		
順	氏名	773	順	氏名	870	順	氏名	892	順	氏名	865	順	氏名	884
1	松本 清張	18	1	西村 京太郎	25	1	西村 京太郎	17	1	宮部 みゆき	17	1	東野 圭吾	18
2	赤川 次郎	16	2	赤川 次郎	22	2	赤川 次郎	14	2	宮尾 登美子	16	2	西村 京太郎	13
3	内田 康夫	13	3	司馬 遼太郎	18	3	司馬 遼太郎	11	3	赤川 次郎	13	3	宮部 みゆき	12
4	司馬 遼太郎	10	4	宮部 みゆき	14	4	松本 清張	10	4	東野 圭吾	12	4	司馬 遼太郎	11
4	西村 京太郎	10	5	松本 清張	13	5	東野 圭吾	8	4	西村 京太郎	12	4	松本 清張	11
4	平岩 弓枝	10	5	内田 康夫	13	5	森村 誠一	8	6	松本 清張	10	6	渡辺 淳一	10
7	宮部 みゆき	8	7	山村 美紗	9	5	内田 康夫	8	6	司馬 遼太郎	10	7	赤川 次郎	9
7	五木 寛之	8	8	よしもとばなな	8	8	瀬戸内 寂聴	7	6	夏目 漱石	10	8	新田 次郎	8
9	宮尾 登美子	7	9	林 真理子	7	8	渡辺 淳一	7	9	五木 寛之	8	8	藤沢 周平	8
9	池波 正太郎	7	10	宮尾 登美子	6	8	夏目 漱石	7	10	渡辺 淳一	7	10	村上 春樹	7
			10	森村 誠一	6	8	藤沢 周平	7	10	村上 春樹	7	10	池波 正太郎	7
			10	池波 正太郎	6	8	シドニイ・シェルダン	7	10	瀬戸内 寂聴	7			
			10	平岩 弓枝	6	8	五木 寛之	7						

2010年代前半(2010年～2012年)

65回<2010(平成22)年>			66回<2011(平成23)年>			67回<2012(平成24)年>		
順	氏名	905	順	氏名	879	順	氏名	882
1	東野 圭吾	22	1	東野 圭吾	27	1	東野 圭吾	35
2	赤川 次郎	16	2	赤川 次郎	19	2	赤川 次郎	15
3	司馬 遼太郎	14	3	宮部 みゆき	16	3	宮部 みゆき	12
4	宮部 みゆき	12	4	西村 京太郎	14	4	司馬 遼太郎	9
5	五木 寛之	11	5	池波 正太郎	9	5	西村 京太郎	8
5	村上 春樹	11	6	瀬戸内 寂聴	7	6	五木 寛之	7
5	藤沢 周平	11	6	曾野 綾子	7	7	松本 清張	6
8	西村 京太郎	10	6	内田 康夫	7	7	瀬戸内 寂聴	6
9	松本 清張	9	9	五木 寛之	6	7	曾野 綾子	6
10	渡辺 淳一	7	9	司馬 遼太郎	6	7	池波 正太郎	6
10	尾田 栄一郎	7				7	渡辺 淳一	6
10	林 真理子	7						



## ★近代活字文化の誕生

農村読書の問題に入る前に、その基盤となる近代日本の活字文化と読書環境の形成について、簡単に触れておきたい。

現在の私たちの読書環境は全国的な同時性を特徴としている。たとえば新聞についてみると、『朝日新聞』『読売新聞』のような全国紙が毎朝いっせいに北海道から九州・沖縄までの各家庭に戸別配達される。また、東京で発行された雑誌もほぼ同じ日に全国の書店の店頭に並ぶ。

全国各地の読者が新聞や雑誌をほぼ同時に読むことができる、このような活字メディアの受容における全国的な同時性という現象を、現在の私たちはあまりにも当然のこととして受け取っている。しかし、このような読書環境は実は明治以降に歴史的に形成されてきたものである。

新聞、雑誌、図書といった活字メディアは重量のある商品であり、それを運ぶためには、物流網の整備が不可欠の前提となる。そして、近代日本において、このような物流網が全国的に発達してくるのは明治20年代からであった。

ちょうど現在の新幹線網の整備と相似する形で、明治20～30年代を通じて、東京・大阪を中心とする鉄道幹線網の全国的な交通輸送の一大全国ネットワークが出現してくる。この全国輸送網の形成を基盤として、活字メディアは全国的な流通網を獲得し、現在の私たちの読書環境が形成されてくる。鉄道開通以前には、例えば北陸地方に東京の新聞雑誌を運ぶためには、船便や馬車、人力車を乗り継いで1週間かかったが、鉄道網の出現によってその日のうちに到着するようになった。

このような活字メディアの全国流通網を基盤にして、中央の近代出版資本とその受け手としての全国にわたるさまざまな読者層からなる近代活字文化が明治中期以降に本格的に誕生してくる。『朝日新聞』『毎日新聞』といった全国紙、『太陽』『少年世界』等の博文館の雑誌、尾崎紅葉や幸田露伴の小説が全国の読者に読まれるようになる。

また、読書のための社会的装置としての図書館も、明治30年代に国家的認知を獲得し始める。明治30年の帝国図書館の誕生、明治32年の図書館令の制定を通じて図書館数は急増し、読書に対する社会的評価の高まりがみられる。

## ★農村における読書環境の立ち遅れ

しかし、以上のような明治期における活字メディアと読書文化の発達は、おもに都市部を中心としたものであり、人口の大部分を占める農村部への浸透はまだ弱かった。農村では書店や図書館や貸本屋といった読書基盤が絶対的に欠けており、新聞や雑誌は郵送で取り寄せることができるにしても、1冊ずつ内容の異なる図書については、現物を手に取ってみることのできない農村では入手は非常に困難であった。

また、読書能力の点においても、明治期の農村家庭では小学校卒業のみで学業を終える者が大部分であり、そのため継続的な読書習慣を身につけるには至らず、読み書き能力も卒業後は急速に低下する傾向にあった。就学率こそ明治40年には97%に達していたが、このことは読み書き能力を国民の大部分が獲得したことを必ずしも意味しなかった。せっかく獲

得した未熟なリテラシー能力でさえ小学校卒業後は急速に失われ、自己の姓名を書くことさえできない状態にまで低下してしまうことさえあった。

このように、明治期の農村では読書環境においても、人々の読書能力においても、読書状況はきわめて低調なものにとどまらざるをえなかつた。

### ★農村への新聞・雑誌の普及

農村への読書の普及はまず新聞から始まる。たとえば大正13年に日本農民組合が岡山県の小作農民について調査した結果によると、1,124世帯のうち、新聞を購読しているのは343世帯（31%）であったが、雑誌を購読している世帯は94世帯（8%）にすぎなかつた。この背景には、農民層をも対象にした大衆娯楽的な雑誌がまだ登場していなかつたことも影響している。

農村への雑誌の普及は、大正14年に講談社の創刊した『キング』とともに始まる。『キング』は紙面内容の徹底的な平易化と大がかりな大量宣伝の手法によって、発行部数100万部を達成することに成功し、それまで読書とは無縁であった多くの大衆層を新たに読者層として開拓した。大正末～昭和初期の雑誌読書調査によれば、『キング』は子どもから大人まで幅広い年齢層に、また男性にも女性にも性別を超えて広く読まれ、職業的にみても学生から労働者・農民まで階層横断的に読まれていた。

農村部においても、『キング』は急速な勢いで浸透していった。昭和初期に実施された農村部の雑誌購読調査の1位はほとんど『キング』によって占められている。昭和6年の富山県のある村落の購読雑誌は『キング』12戸、『富山県農業雑誌』7戸、『在郷軍人富山県支部報』5戸といった状況であった。

『キング』の進出の背景にあるのは、農村における娯楽の乏しさという状況であった。この時期の農村の娯楽は盆踊りや民謡といった旧来からの伝統的な娯楽のみで、新しい娯楽の代表である映画は農村では観賞する機会がきわめて少なかつた。そのなかで、大衆的な読み物は娯楽源として貴重な存在であったが、農村を対象とした娯楽性豊かな雑誌自体がそれまで発行されてこなかつた。「面白くて為になる」『キング』が農村でも非常な歓迎を受けたのは、このような理由によるものであった。

### ★『家の光』の普及

しかし、農村における『キング』の人気は昭和6、7年頃を境に急速にくずれしていく。それは産業組合中央会発行の『家の光』の農村への全国的進出によるものであった。大正14年創刊の『家の光』は発行部数2万部で出発したが、昭和6年には10万部の大台に達している。この時期以降、農村での購読雑誌の1位はほとんど常に『家の光』に代わり、『キング』は二番手に後退していく。例えば、昭和6年の栃木県安蘇郡内4,752戸の購読雑誌の上位は『家の光』90戸、『処女之友』64戸、『キング』44戸、『主婦之友』32戸という状況であった。また、昭和9年、岩手県のある農村35戸の購読雑誌は『家の光』15戸、『キング』2戸であった。

農村のための初めての大衆娯楽雑誌ともいべき『家の光』は、内容的にも万人にわかり

やすく、読みやすい雑誌を編集方針として掲げ、また普及委員制度を設けて計画的な普及運動を推進したこと、さらには、「家の光会」「家の光読書会」を通じて読者の組織化を促進したことあって、昭和10年には発行部数100万部を達成した。

## ★農村への図書の普及

新聞や雑誌の普及に比べて、農村での図書の普及はきわめて弱かった。しかし、新聞・雑誌に日常的に親しみ、読み書き能力を日々鍛えつつあった読者層が大正期までには農村にも幅広く形成されてきており、図書への欲求が拡大しつつあった。

農村への図書の普及が本格的に始まるのは、「円本」の登場によってであった。大正15年10月に募集を開始した改造社の『現代日本文学全集』は、1冊わずか1円の予約購読制による明治大正期の文学全集であったが、非常な反響を呼び、瞬く間に数十万人の予約者を獲得した。その成功に刺激されて他の出版社も相次いで参入し、ここに出版史上有名な円本ブームが巻き起こり、200種類にも達する全集物が出版された。

円本ブームは農村にも波及したが、農村において円本を予約購読できる階層は地主や自作農にとどまり、小作層にまでは及ばなかった。定期的な現金収入に乏しい大部分の農民層にとっては、円本の予約購読は経済的にも心理的にもかなりな負担を伴うものであった。

しかし、円本ブームによって大量に出版された円本のストックは古本屋や露店商を通じて、10銭、20銭といった非常に安価な価格で全国的に流通するようになり、経済的に余裕のない農民層でも容易に買えるようになっていった。円本ブーム以前の農村においては、身近な読み物は講談本ぐらいであったが、円本ブーム以降は『レ・ミゼラブル』や『復活』といった世界文学から、漱石・鷗外の近代日本文学まで内外の古典的名作が農村の各家庭にストックされるようになり、農村の読書環境は格段に向上した。

## ★昭和初期の農村の読書率

では、この時期に、農村の読書率はどの程度だったのであろうか。残念ながら、戦前においては組織的かつ継続的な農村読書率の調査は行われていないので、農村における読書状況について知ることはかなり困難である。

一つの材料として、『文藝春秋』の昭和4年6月号に「農村の読書率」と題する兵庫県の1農民からの投書が掲載されている。それによると、彼の住む農村の18歳以上の村民172人のうち、新聞を毎日または折々に読む者は47名(27%)、雑誌を毎月または折々に読む者は52名(30%)、書籍を毎月または折々に読む者は39名(23%)であった。この農村では、およそ2割から3割程度の者が活字メディアを読む習慣を身につけていたことがわかる。

このわずかな一例を一般化することはできないが、『キング』『家の光』の登場や、円本の進出によって、農村においてもようやく雑誌や図書に日常的に親しむ読者が昭和初期以降増えつつあったと思われる。

## ★昭和10年代の雑誌読書調査

昭和10年代には、各地の農村でいくつかの雑誌読書調査が実施されている。昭和10年の長野県浦里村820戸で読まれている雑誌は『家の光』180戸、『キング』41戸、『主婦之友』38戸の順であった。

昭和13～14年頃の宮城県農村青年学校の「毎月読まれる雑誌」調査では『家の光』41%、『キング』20%、同じく新潟県農村青年学校では『家の光』53%、『キング』15%であった。『家の光』は都市部でも『キング』に次いで広く読まれるようになり、例えば昭和18年に東京・神奈川の工場勤労青年1,228人の毎月読む雑誌は『キング』216人、『青年』109人、『家の光』81人であった。

以上の調査からもわかるように、昭和10年代の雑誌界は都市部は『キング』、農村部は『家の光』、また女性層には『主婦之友』が圧倒的に読まれるようになり、この大衆3誌の寡占状態が終戦まで続いている。

## ★戦時下的読書運動

戦時下においては、中田邦造を中心的指導者とする「国民読書運動」が全国的に展開されていくが、この動きを受けて、農村部においても産業組合中央会によって昭和17年から「興村読書運動」が開始され、農村文庫の設置や読書指導を中心とする農村部の読書振興策が実施されていく。

その一環として、農村文庫の設置状況等についても全国的な調査が行われており、その調査結果は、農村文庫の設置数が594（そのうち産業組合関係の設立によるもの152）、文庫の平均蔵書冊数は850冊、家の光読書会の数は133、読書指導開催回数は総数340回となっており、小規模な蔵書ではあるが、産業組合を中心的な担い手として農村文庫の設置や読書指導が活発に行われていたことがわかる。

## ★戦後の農村読書状況

戦後になると、「全国農村読書調査」をはじめ、いくつかの全国的な読書調査が継続的に実施されるようになり、農村あるいは農業層における読書率や読書状況の経年的な変化について知ることが可能になる。それらの調査結果については、本書の第2章で詳しく論じられているので、ここでは、他の階層との比較で農業層の読書状況について簡単に触れたい。

すでに戦前についてみてきたように、都市部を中心に発展してきた活字文化から農村は長らく取り残されており、大正から昭和にかけてようやく雑誌や円本が農村でも読まれるようになったが、新中間層を中心とする都市部の住民との間には、戦前を通じて読書率の大きな格差が存在していた。

この状況は戦後になってもそのまま存続し、全国的な読書調査を通じて、農業層は雑誌の読書率においても書籍の読書率においても、都市部の新旧中間層や労働者層よりも低い状況が高度成長初期まで続いていることが明らかとなった。農村における不読書現象が読書調査を通じて表面化してきたのである。この原因として、農村における就業時間の長さ、修養娯楽費の少なさとともに、書店や図書館といった読書基盤が農村部には全般的に貧弱であった

ことが大きい。

### ★農村読書環境の改善運動

このような農村の立ち後れた読書環境を改善するために、戦後さまざまな努力が積み重ねられてきた。

終戦直後は出版流通網の寸断によって図書の入手が非常に困難になったが、とりわけ農村部における良書の入手難を解決するために、家の光協会は昭和22年に東畑精一や河崎なつ等を顧問にして「家の光ブック・クラブ」を開設した。月会費制で、団体・個人向けに毎月5、6冊の図書を選定して配本するこのブック・クラブは、全国にわたって多くの会員を獲得して昭和39年まで継続し、農村の民主化・近代化に大きく貢献した。

私立南多摩農村図書館を拠点に、農民に本を読ませようという農村図書館運動を開始した浪江慶の活動は、農村向きの良書の乏しさを改善するために、農民にも読みやすくわかりやすい本の出版にまで発展し、その1冊である『誰にもわかる肥料の知識』はベストセラーになった。また、都道府県立図書館等において、ブックモビール（自動車による移動図書館）の導入が進み、図書館のない農村部への図書館サービスの提供を可能にした。

読書運動の面においても、長野県立図書館によって行われた「P T A母親文庫」や、鹿児島県立図書館によって始められた「親と子の20分間読書」運動は農村部にも広く普及するようになり、農村の読書振興に貢献した。

### ★高度成長期以降の読書環境

高度成長期以降の都市化に伴う過疎化の進行は、農村の読書環境の一段の劣化をもたらした。過疎化の進行は書店の存立基盤をゆるがし、1990年代には全国で書店のない町村が48%、図書館のない町村が79%、書店も図書館もない町村が42%にも達している。特に過疎地農村の多い西日本にこの傾向が強い。このような町村に住む住民は図書の入手に多大な手数を要するため、その結果として、読書自体から遠ざかる人々の増大を招くことになる。

このような農村読書環境を改善するために、90年代以降組織的な活動を展開してきたのが「日本出版文化産業振興財団」（略称JPIC）である。出版社・取次・書店等の出版産業関係者によって設立されたJPICは、地域読書環境整備事業に力を入れ、全国各地の町村と連携して町村営書店の設立と運営を手がけてきた。大分県耶馬渓町の「わかば書店」、岩手県三陸町の「ブックワールド椿」等がその例である。これらの事業は順調な成果を上げ、町村地域における書店の存在の重要性を改めて再認識させる結果となった。

家の光協会によって推進されたさまざまな農村読書振興運動も重要である。一般に農村においては本を読むことに対して周囲の理解がなく、読書よりも農作業をしろという無言の圧力が支配的となっていた。この問題を解決するために家の光協会では、農村でも読書しやすい方法として「読書グループ」の育成を重視し、読書会の組織化による共同的読書の方向を推し進めていった。そのほか、「全国農村読書体験文」の募集、「家の光読書ボランティア養成講座」等が若干形を変えながらも現在まで継続して行われてきている。

## ★出版・読書文化の変容と農村読書

90年代以降、雑誌と書籍の売上高が年々落ち込むようになり、「活字離れ」がいわれて久しい。また、書店や出版流通面においても、1990年に誕生したブックオフの急成長、2000年におけるアマゾンの日本進出や、超大型書店の増加と中小書店の減少といった読書環境の激変が起きている。

その中で、今後の農村の読書状況に最も重要な影響を及ぼす可能性のあるのは、電子書籍の動向である。ここ数年、電子書籍の進展はめざましく、さまざまな電子書籍リーダーが登場し、文字の大きさの変更や読みあげ機能等も加わるようになり、普及の度を強めつつある。

電子書籍は、これまで農村読書にとって強い制約として働いてきた書店や図書館といった読書基盤を必要としないため、農村読書環境改善の有力なメディアとなる可能性を秘めている。最近の全国農村読書調査の結果では、電子雑誌や電子書籍の読書率はまだわずかなものにとどまっているが、若い世代では徐々に増え始めている。今後の動向が注目されるところである。

## ★『家の光』と全国農村読書調査の意義

本章の最後に、農村読書にとっての『家の光』と「全国農村読書調査」の意義をまとめてみよう。明治以降の近代日本の活字メディアは基本的に都市部の中産層や学生・女性を対象としたものであり、農村は大正後期まで活字文化の発展から疎外され、取り残されていた。農村を対象とした娯楽性豊かな雑誌も発行されることなく、農民はかれら自身の雑誌と呼べるものを持っていなかった。

そこに登場したのが、大正14年創刊の『家の光』であった。産業組合発行という特殊な発行形態ではあったが、『家の光』はそれまで活字文化から取り残されていた農村に実用的・娯楽的な情報を提供するという編集方針を一貫して掲げ、農村読者から圧倒的な歓迎を受けた。また、「家の光大会」「家の光読書会」等のイベントを通じて、産業組合の方針のもとに農村読者を組織化してまとめあげていく機能をも果たした。もし、『家の光』という雑誌が創刊されていなかつたら、農村地域は活字文化の発展から取り残された砂漠のような貧しい状況のままにとどまっていたのではなかろうか。

また、「全国農村読書調査」についても、農村部における読書状況の実態を67年間という長期にわたって把握できる貴重な調査であり、この調査がなければ、農村の読書実態はまったくの闇に閉ざされたままに終わっていた。最近ではIT時代に対応して、インターネット上の読み物や電子書籍の読書状況に関する調査も新たに加わり、読書環境の変化に対応している。10年後、50年後、100年後の農村の読書状況がどのような変貌を遂げているか、今後も全国農村読書調査に期待されるところはきわめて大きい。

さらに、『家の光』および産業組合によって推進されたさまざまな読書運動についても、それが元来活字文化から疎外されがちな農村部を中心に展開されてきたこと、昭和初期から現在まで長期にわたって継続して実行されていることもある、農村の読書振興に果たしてきた役割はきわめて重要であり、今後とも引き続き推進していく必要がある。

永嶺重敏 東京大学文学部 図書館勤務

\*文中で紹介した戦前の読書調査の詳細については、拙著『雑誌と読者の近代』『読書国民の誕生』等を参照されたい。

## **全国農村読書調査のあゆみ**

**1946-2012**

---

2013年5月発行

発行所 一般社団法人 家の光協会

〒162-8448

東京都新宿区市谷船川原町11

制作 一般社団法人 家の光協会

協同・文化振興本部 読書・食農教育部

TEL 03-3266-9038

FAX 03-3266-9337

デザイン 口コ・モーリス組

作図 一般社団法人 新情報センター

発行所 株式会社 興栄社

---

